

『相談援助の理論と方法 I』との出会い・交わり・別れ

—Langer & Lietz によるジェネラリストソーシャルワーク実践理論を学ぶ—

佐々木政人

Generalist Social Work Education in Japan

—Learning Social Work Practice Theories by Langer & Lietz—

Masahito Sasaki

要旨：筆者が愛知淑徳大学福祉貢献学部で、『相談援助の方法と理論 I』の科目担当になったのは、2016 年度からである。本科目は、『社会福祉援助技術総論』として、前任校である日本社会事業大学と龍谷大学社会学部時代にも一部代講を含む分担授業等で多くの学びと示唆を諸先生から得てきている。小松源助先生・尾崎新先生・前田ケイ先生（日本社会事業大学時代）、黒川昭登先生・太田義弘先生（龍谷大学時代）をはじめ、春見静子先生・伊藤春樹先生・神波幸子先生（愛知淑徳大学時代）に感謝を申し上げる。本論で主に取り上げる理論的基本枠組みは、(1) ジェネラリストソーシャルワーク（エコ・システムの視座に依拠）、(2) ライフモデル論、(3) バイステックの『ケースワークの 7 つの原則』、(4) アイビーの『マイクロカウンセリング理論』である。なお、本授業の内容と過程は、Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) *Applying Theory to Generalist Social Work Practice*. New Jersey: Wiley および岩間伸之・白澤政和・福山和女編著（2010&2013）『ソーシャルワークの理論と方法 I』ミネルヴァ書房に依拠している。

Keywords： エコ・システムの視座 ライフモデル論 ケースワークの原則 マイクロ技法
Ecological and Systems Perspectives; Life Model of Social Work Practice; Casework Principles; Micro Counseling

1. はじめに：ソーシャルワーク教育における基本枠組み・実践モデル・支援技法

人間は、それぞれの人生において、目標と課題を持って生きてきている。その過程における経験と対峙、苦闘は貴重な学びである。人間の課題解決の過程と生き方とは、その人間の人生と生活とを豊かに彩ってくれる応援歌でもある。ギッターマン A. , ジャーメイン C. , マイヤー C. , パールマン H. H. , バイステック F. P. 等が提示する欧米のソーシャルワーク論は、多くの示唆と共感を私たちソーシャルワーカーに提示してくれている。本論文では、ソーシャルワーク実践教育の歩みを振り返り、かつ具体的な支援方法を学ぶための契機を提供する。本論全体を支える基盤枠組みは、エコ・システムの視座である。また具体的なソーシャルワーク実践モデルは、ライフモデル論を基本とする（エコロジカルモデル）。

2. 理論的基本枠組み：ジェネラリストソーシャルワークへの橋渡し

『ソーシャルワークの理論と方法 I』は、ソーシャルワークを総合的に把握するための基盤として、『社会福祉援助技術総論』と題し、社会福祉士制度が発足した時代に創設されている。その基盤とする理論的枠組みは、当時の多くの実践理論家等によって提示されている（小松，2002；太田，1992）。しかし、日本独自の枠組み論研究は、当時北米を中心とする実践モデルに依拠して構築され、それ以降も日本の文化、制度、政策に則った理論構築は十分には開発しきれずに今日を迎えている。筆者自身もこうした課題を意識しながらも、その課題を克服するための試みを提示することは出来なかった。ここでは、さまざまな限界性を持ちつつも、21 世紀における日本独自のソーシャルワーク論の展開を念じ、これまで提示してきた実践理論や教材資料等を整理する。

取り上げる課題と理論的基盤は次のとおりである：（1）ソーシャルワーク実践における基本枠組み（エコ・システムの視座）、（2）ソーシャルワーク実践モデルとしてのライフモデル論、（3）ソーシャルワーク実践の古典的存在である『ケースワークの 7 原則（バーステック）』、および（4）ソーシャルワーク実践を具体化する援助技法の一つであるマイクロ面接技法等である。

（1）ソーシャルワーク実践における基本枠組み（エコ・システムの視座）

個人には、ライフコース、ライフステージ、ライフサイクル上の変化やそれに伴う役割・機能上の発達と、成長とがある。個人の成長には、第一義的環境、すなわち家族環境が重要となっている。家族システムとしての環境とは、家族を取り巻く生活上の出来事、変化、サイクルである。個人の成長の課題を考えるには、同時並行的に、家族の生活上の変化と段階を理解する過程は、貴重である。支援環境としての家族が持っている潜在性、あるいは脆弱性をともに理解することが重要である。

個人の問題・課題の解決には、家族支援システムの輪を再構築していくための努力がその基盤となる（佐々木，2019；Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A., 1994）。また、家族システムと地域システムとの接点や関係性も注目すべき重要な交わりシステムである。エコ・システムズパースペクティブとして認知されているエコロジカル理論とシステム理論は、こうした相互作用・交互作用現象を的確に把握するための基礎理論であり、その枠組みを提示している（Meyer, 1983; Langer & Lietz, pp.31-35）。

表 1 と表 2 は、ソーシャルワーク実践を理論的に理解するための示唆に富む概念規定とその原則である。この考え方は、エコ・システム論として、日本のソーシャルワーク実践にも導入されて久しい。Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) 等は、Bronfenbrenner (1979), Germain & Bloom (1999), Gitterman & Germain (2008) の理論構築を的確に整理している。主要な概念とは、システム、バウンダリー、アダプテーションである。人間システムと環境システムとの交互作用関係をソーシャルワーク実践の中心基盤に示している。特に各システムの構造と機能との関係性、交互作用関係上の流れと背景を捉えることの重要性を強調している。家族システム、援助機関システム、地域システム等の保持している脆弱性はもとより、潜在力と生命力を提示している。

表 1：生態学／システム理論に関する重要な概念（試訳）

システム	An organized entity made up of <i>interrelated</i> and <i>interdependent</i> parts :
バウンダリー	<i>Barriers</i> that <i>defined</i> a system and <i>distinguish</i> it from other systems in the environment :
ホメオスタシス	The tendency of a system to <i>resist change</i> and <i>maintain status quo</i> :
Adaptation	システム自身を保護し、その <u>目標</u> を達成するために <u>成長</u> しようとする傾向
Reciprocal transactions	システム同士が <u>交互に作用</u> し合う <u>円環的相互作用</u>
Feedback Loop	環境内の他システムからの反応に基づき、 <u>自己制御システム</u> による過程
マイクロシステム	The system closest to the <i>client</i> :
メゾシステム	<i>Relationships among the systems</i> in an environment :
エグゾシステム	A <i>relationship between two systems</i> that has an indirect effect on a third system :
マクロシステム	A <i>larger system</i> that influences clients, such as <i>policies, administration of entitlement programs, and culture</i> :
クロノシステム	A system composed of <i>significant life events</i> that can affect adaptation :

《挑戦課題：英文の箇所に日本語訳を入れましょう》

表 2：生態学／システム理論に関する原則（試訳）

原則 1	システムは <u>相互に関係</u> しあい、 <u>相互に依存</u> しあっている
原則 2	システムは <u>バウンダリー</u> と <u>ルール</u> に依って規定されている
原則 3	システムは <u>予想可能な行動パターン</u> を提示する
原則 4	A system is <i>more than the sum of its parts</i> :
原則 5	Changing one part of a system <i>affects</i> the <i>other parts</i> of and the <i>whole system</i> :
原則 6	<i>Goodness of fit</i> with the environment leads to positive <i>growth</i> and <i>adaptation</i> :

Source: Bronfenbrenner (1979); Germain & Bloom (1999); Gitterman & Germain (2008).

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) pp.27-55（一部筆者付記：資料編参照）

《挑戦課題：英文の箇所に日本語訳を入れましょう》

本セクションでの理論的背景を構築する基本用語は、上記のとおりである。その他、ストラクチャー、ヒエラルキー、エントロピー・ネグエントロピー、イクイフィナリティ・マルチフィナリティ等、興味引かれる多様な現象が提示されている（Meyer, C.H. 1983；Gitterman & Germain, 2008；Kirst-Ashman, K. K. & Hull, G. H Jr., 2006）。授業では、こうした重要な基本概念にもふれ、かつその歴史的流れにも適宜言及している。ジェネリック、システムック、

交互作用，リサーチヤー＝プラクティショナー，アドボケイター，ジェネラリストへの理解を深める機会ともなっている．特に社会福祉実習との関連性は重要であり，実践領域におけるジェネリックな志向性，およびその重要性を講義に含める努力をしてきている．

(2) 実践モデルとしてのライフモデル論

ライフモデル論に立脚したソーシャルワーク実践論 (The Life Model of Social Work Practice) は，ジャーメイン&ギッターマンにより，1970年代後半に構築され，その基本枠組みは後述資料のとおりである．成長に伴う変化や生活上の変化，環境上の変化，コミュニケーション上の課題と機能不全が，その大枠である(Germain & Gitterman, 1979; Langer & Lietz, pp.27-55; Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A., 1994, pp. 297-298)．図1はその概観である．授業では，日本独自の生活課題とは何か，その発生と解決の流れ，関係する人々との対峙・交流，あるいは解決の糸口となる場の共有等，ソーシャルワーク実践の基盤をともに考える．

生活上の変化及び外傷体験となる出来事：個人・家族・集団の生活上の変化と不適応

①個人の成長に伴う変化②家族のライフサイクル③社会的地位・役割上の変化④危機的出来事
例：誕生日の思い出，入学式，卒業式，兄弟・姉妹の誕生，就活・就職，パートナーとの出会い，結婚，出産，妻・夫から母親・父親への役割変化，転職，退職，娘や息子の結婚，高齢期への対応，離婚，離別，パートナーとの別れ，年中行事：お正月・羽根つき・節分・彼岸・花見・母の日・七夕・盆・月見・七五三・歳暮・忘年会・バレンタインデー・ひな祭り，その他である．

環境からのプレッシャー：生活環境の急激な変化と不適応

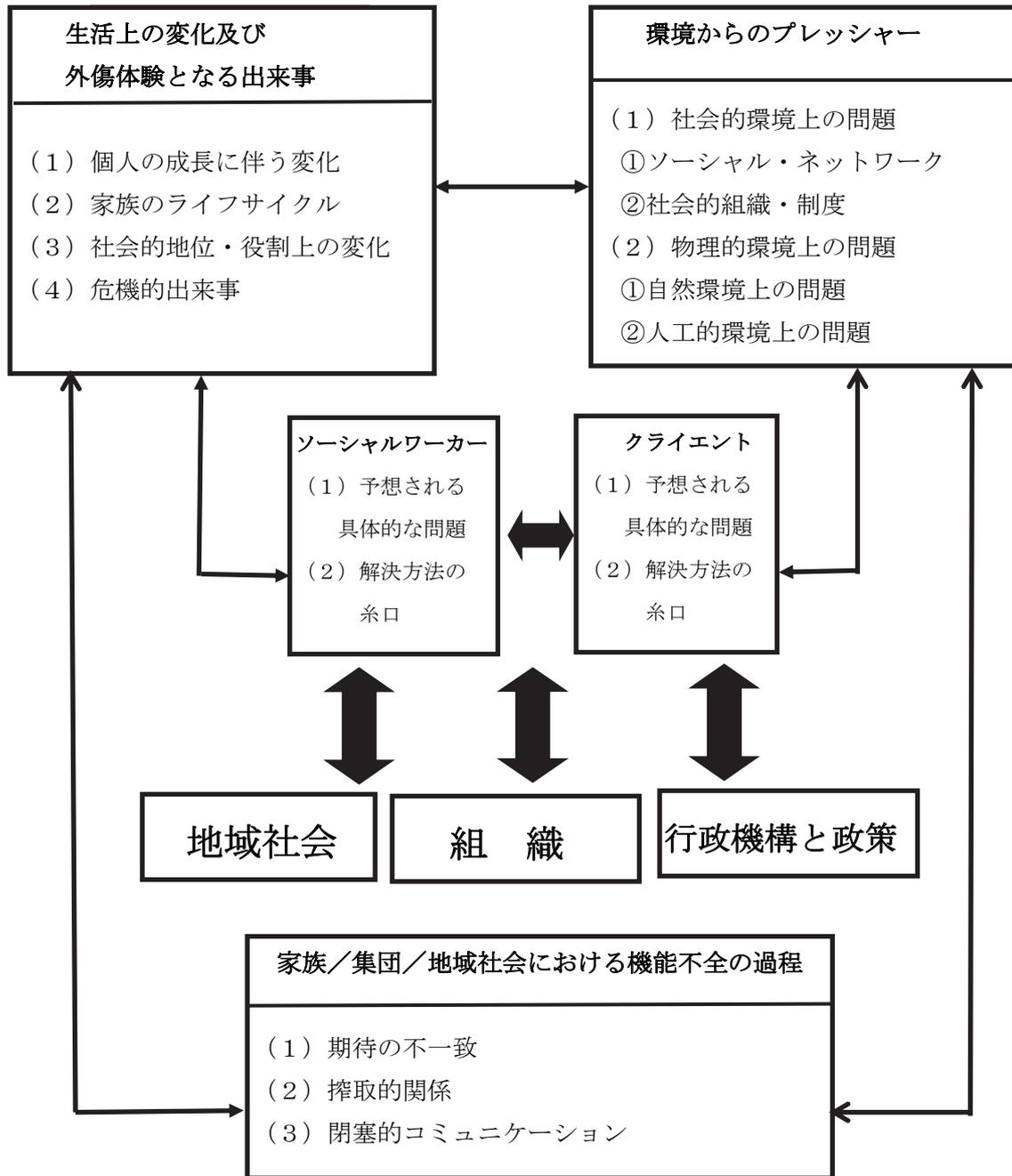
①社会的環境上の問題（ソーシャル・ネットワーク 社会的組織・制度）②物理的環境上の問題（自然環境上の問題 人工的環境上の問題）
例：家族を取り巻く，地域社会の変化への対応は，多くのプレッシャー要件となる．生活環境の急激な変化は，適応状況への成否と関連している．家族の絆の再構築を迫る出来事となる．

家族／集団／地域社会における機能不全の過程：家族・親戚システム，組織・地域社会システム内での軋轢

①期待の不一致 ②搾取的関係 ③閉塞的コミュニケーション等の対人関係上のプレッシャーと不適応

例：男女間の役割期待の不一致・乖離，夫婦間の搾取的関係，会社組織内の上下関係，地域社会におけるタブー，持たれ合い，臭いものには蓋，村八分，過剰な権利意識，偏った政治運動，極端な付度意識，チクリあい，いじめ，各種のハラスメント，過剰な情報網，扇動行為，疑心暗鬼，カオス社会，その他である．現代社会の生活問題は，より一層深刻化の状況を提示している．

図 1：ライフモデル実践論の基本枠組み：専門的機能と生活上のストレッサー（試案）



出典：Germain, C.B. and Gitterman, A. (1980, 1996 & 2008). *The Life Model of Social Work Practice* (First, Second & Third edition), New York: Columbia Univ. Press, p.11 & pp.1-341 (First edition); p.28 & pp.25-454 (Second edition); p.74 & pp.71-522 (Third edition). ジャーメイン & ギッターマンの「ライフモデル」に関する各種の図を基本に、京都国際社会福祉センターにおける『援助専門職講座』等の教材資料を筆者が試案として融合・改変する。

(3) ソーシャルワーク実践を豊かにする原則 (『ケースワークの原則 (バイステック)』)

この7つの原則は、これまでも多くの研究者や実践家によって紹介されてきている (フェリックス・P・バイステック 1996)。すなわち、①個別化の原則 (クライアントを個人として捉える)、②意図的な感情表現の原則 (クライアントの感情表現を大切にすること)、③統制された情緒関与の原則 (援助者は自分の感情を自覚して吟味する)、④受容の原則 (受け止める)、⑤非審判的態度 (クライアントを一方向的に非難しない)、⑥自己決定の原則 (クライアントの自己決定を促して尊重する)、⑦秘密保持の原則 (秘密を保持して信頼感を醸成する)、は、基本原則である。実践援助過程を充実・促進する上で必須の条件であるが、実践展開過程において、こうした原則とソーシャルワーカー自身との交わり関係上のジレンマ、揺らぎと戸惑いを実感する過程でもある。

授業の流れは、以下の手順である。授業内では時間的な制約があり、これまで十分には展開しきれてはいないが、そのニュアンスは継続的に伝える努力をしている (音読＝写本メソッド:佐々木試案)。具体的な展開法は以下のとおりであり、5つの段階から構成される。

1. 配布資料を読む

- ①黙 (目) 読: 視覚的な学びの体験: 静寂の中の集中力を慈しむ
- ②音読 (聴) 読: 聴覚的な学びの体験: 声の響きの心地よさを感じ、音読・朗読を楽しむ
- ③心読 (精) 読: 精神的学びの体験: 研ぎ澄ました心で文献を講読する喜びを感じる

2. 重要な表現や語句に下線を引く

提示した教材資料を各自が、読み込み、それに下線をマーカー等で強調する。初めて出会う語句、表現法、制度・政策等、馴染のない用語との出会いである。

3. 書き写す

心をこめて写経することに類似している。無心になり、書き写す作業は心落ち着く作法である。無になること、空になることは、これまでの考えから一歩引き、振り返る力となる。

4. 考えを整理する

自分の既存の考え方を検証する作業である。考えを整理し、順序立てて物事を再考する試みをおして、新たなステップ、アプローチに出会うチャンスとなる。

5. クラスで討議・検討する

クラスでの討議の機会をとおして、多様な課題の分析を可能にし、かつフレキシブルな対応法を考え出す機会を提供する。また、実習への橋渡しとなるチャンスでもある (演習系科目・実習系科目を含む)。音読や写本メソッドは、単純で、忍耐力を伴う学習法ではある。今日のIT時代には合致しない方法であるかもしれない。そうした中にも、何かしらのメリットが想定できる。試行錯誤の試みを今後も実施していきたい。以下、バイステックのケースワーク 7 原則を参考に、音読・写本教育メソッドの例示をする。また、翻訳の難しさも同時に理解でき、英語表現の学びともなる。日本のソーシャルワーク実践との類似点、価値観、姿勢等の違いを感じ、新たな実践のあり方を模索するチャンスとなる。キリスト教と仏教等、多様な文化・宗教観の異なる、日本文化を基盤とした『ソーシャルワークの原則』とは何かを考える契機となれば嬉しい。

表 3 : ケースワークの 7 つの原則 (パート I) 『古典との出会い』

原則 1
<p>1. 個別化の原則 (クライアントを個人として捉える) :</p> <p>クライアントを個人として捉えることは、<u>一人ひとりのクライアントがそれぞれに異なる独特な性質</u>を持っていると認め、それを理解することである。また、クライアント一人ひとりがより良く適応できるよう援助する際には、それぞれのクライアントに合った援助の原則と方法を適切に使いわけることである。これは、人は一人の個人として認められるべきであり、単に「<u>一人の人間</u>」としてだけではなく、独自性をもつ「<u>特定の一人の人間</u>」としても対応されるべきであるという人間の権利にもとづいた援助原則である。</p> <p>Principle 1: INDIVIDUALIZATION Individualization is the recognition and understanding of <i>each client's unique qualities</i> and the differential use of principles and methods in assisting each toward a better adjustment. Individualization is based upon the right of human beings to be individuals and to be treated not just as <u>a</u> human being but as <i>this</i> human being with his personal differences.</p>

原則 2
<p>2. 意図的な感情表現の原則 (クライアントの感情表現を大切にすること) :</p> <p>クライアントの<u>感情表現</u>を大切にすることは、クライアントが彼の感情を、とりわけ<u>否定的感情</u>を自由に表現したいというニーズをもっていること、きちんと認識することである。ケースワーカーは、彼らの感情表現を妨げたり、非難するのではなく、彼らの感情表現に援助という目的をもって耳を傾ける必要がある。そして、<u>援助を進める上</u>で有効であると判断するときには、彼らの感情表出を積極的に刺激したり、表現を励ますことが必要である。</p> <p>Principle 2: PURPOSEFUL EXPRESSION OF FEELINGS <i>Purposeful expression of feelings</i> is the recognition of the client's need to express his feelings freely, especially his <i>negative feelings</i>. The caseworker listens purposefully, neither discouraging nor condemning the expression of these feelings, sometimes even actively stimulating and encouraging them when they are <i>therapeutically</i> useful as a part of the casework service.</p>

原則 3
<p>3. 統制された情緒的関与の原則 (援助者は自分の感情を自覚して吟味すること) :</p> <p>ケースワーカーが自分の感情を自覚して吟味することは、まずはクライアントの<u>感情に対する感受性</u>をもち、クライアントの感情を理解することである。そして、ケースワーカーが援助という目的を意識しながら、クライアントの感情に、<u>適切なかたちで反応</u>することである。</p> <p>Principle 3: CONTROLLED EMOTIONAL INVOLVEMENT The controlled emotional involvement is the <i>caseworker's sensitivity</i> to the client's feelings, an understanding of their meaning, and a purposeful, <i>appropriate response</i> to the client's feelings.</p>

出典：フェリックス・P・バイスティック(1996)『ケースワークの原則 (尾崎他訳)』誠信書房 36, 54-55, 77 および Biestek, F. P. (1957) *The Casework Relationship*, Chicago, Illinois: Loyola Univ. Press, p.25, p. 35, & p.50

《あなたのキーワードを探しましょう》

気づきと学びのコメント：

- (1) 理解（音読の感想も含む）
- (2) マイクロ技法との関連性
- (3) 実践事例への応用

《あなたのキーワードを探せましたか》

表 4：ケースワークの 7 つの原則（パート II）『古典との出会い』

原則 4
<p>4. 受容の原則（受け止める）：</p> <p>援助における一つの原則である，クライアントを受けとめるという態度ないし行動は，ケースワーカーが，クライアントの人間としての<u>尊厳と価値</u>を尊重しながら，彼の<u>健康</u>さと弱さ，また好感をもてる態度ともてない態度，肯定的感情と否定的感情，あるいは建設的な態度および行動と破壊的な態度および行動などを含め，クライアントを<u>現在のありのままの姿</u>で感知し，クライアントの全体に係ることである。</p> <p>しかし，それはクライアントの逸脱した態度や行動を許容あるいは容認することではない。つまり，受けとめるべき対象は，「好ましいもの」(the good) などの価値ではなく，「真なるもの」(the real) であり，<u>ありのままの現実</u>である。</p> <p>受け止めるという原則の目的は，援助の遂行を助けることである。つまりこの原則は，ケースワーカーがクライアントをありのままの姿で理解し，援助の効果を高め，さらにクライアントが<u>不健康な防衛</u>から自由になるのを助けるものである。このような援助を通して，クライアントは安全感を確保しはじめ，彼自身を表現したり，自ら自分のありのままの姿を見つめたりできるようになる。また，いっそう現実^に即したやり方で，彼の問題や彼自身に対処することができるようになる。</p> <p>Principle 4: ACCEPTANCE Acceptance is a principle of action wherein the caseworker perceives and deals with the client <i>as he really is</i>, including his <u>strengths</u> and weaknesses, his congenial and uncongenial qualities, his positive and negative feelings, his constructive and destructive attitudes and behavior, maintain all the while a sense of the client's <u>innate dignity</u> and <u>personal worth</u>.</p> <p>Acceptance does not mean approval of deviant attitudes or behavior. The object of acceptance is not “the good” but “the real.” The object of acceptance is <u>pertinent reality</u>.</p> <p>The purpose of acceptance is therapeutic: to aid the caseworker in understanding the client as he really is, thus making casework more effective; and to help the client free himself from <u>undesirable defenses</u>, so that he feels safe to reveal himself and look at himself as he really is, and thus to deal with his problem and himself in a more realistic way.</p>

《あなたのキーワードを探しましょう》

原則5

5. 非審判的態度の原則（クライアントを一方的に非難しない）：

クライアントを一方的に非難しない態度は、ケースワークにおける援助関係を形成する上で必要な一つの態度である。この態度は以下のいくつかの確信にもとづいている。すなわち、ケースワーカーは、クライアントに罪があるのかないか、あるいはクライアントがもっている問題やニーズに対してクライアントにどのくらい責任があるのかななどを判断すべきではない。しかし、われわれはクライアントの態度や行動を、あるいは彼がもっている判断基準を、多面的に評価する必要はある。また、クライアントを一方的に非難しない態度には、ワーカーが内面で考えたり感じたりしていることが反映され、それらはクライアントに自然に伝わるものである。

Principle 5: THE NONJUDGMENTAL ATTITUDE

The nonjudgmental attitude is a quality of the casework relationship; it is based on a conviction that the casework function excludes assigning guilt or innocence, or degree of client responsibility for causation of the problems or needs, but does include making evaluative judgments about the attitudes, standards, or actions of the client; the attitude, which involves both thought and feeling elements, is transmitted to the client.

出典：フェリックス・P・バイスティック(1996)『ケースワークの原則（尾崎他訳）』誠信書 141

およびBiestek, F. P. (1957) *The Casework Relationship*, Chicago, Illinois: Loyola Univ. Press, p.72 & p.90.

《あなたのキーワードを探しましょう》

気づきと学びのコメント：

(1) 理解（音読の感想も含む）

(2) マイクロ技法との関連性

(3) 実践事例への応用

《あなたのキーワードを探せましたか》

表 5 : ケースワークの 7 つの原則 (パート III) 『古典との出会い』

原則 6
<p>6. 自己決定の原則 (クライアントの自己決定) :</p> <p>クライアントの <u>自己決定</u> を促して尊重するという原則は, ケースワーカーが, クライアントの <u>自ら選択し決定</u> する自由と権利そしてニードを, 具体的に認識することである. また, ケースワーカーはこの権利を尊重し, そのニードを認めるために, クライアントが利用することのできる <u>適切な資源を地域社会や彼自身のなかに発見して活用</u> するよう援助する責務をもっている. さらにケースワーカーは, クライアントが彼自身の潜在的な自己決定能力を自ら活性化するように刺激し, 援助する責務ももっている. しかし, 自己決定というクライアントの権利は, クライアントの <u>積極的かつ建設的決定</u> を行なう能力の程度によって, また市民法・道徳法によって, さらに社会福祉機関の機能によって, 制限を加えられることがある.</p> <p>Principle 6: CLIENT SELF-DETERMINATION</p> <p>The principle of client <u>self-determination</u> is the practical recognition of the right and need of clients to freedom in making their <u>own choices</u> and <u>decisions</u> in the casework process. Caseworkers have a corresponding duty to respect that right, recognize that need, stimulate and help to activate that potential for self-direction by helping the client to see and use the available and appropriate <u>resources of the community and of his own personality</u>. The client's right to self-determination, however, is limited by the client's capacity for <u>positive and constructive decision making</u>, by the framework of civil and moral law, and by the function of the agency.</p>

原則 7
<p>7. 秘密保持の原則 (秘密を保持して信頼感を醸成する) :</p> <p><u>秘密を保持</u> して信頼感を醸成するとは, クライアントが専門的援助関係のなかでうち明ける秘密の情報を, ケースワーカーがきちんと保全することである. そのような秘密保持は, クライアントの基本的権利にもとづくものである. つまり, それはケースワーカーの <u>倫理的な義務</u> でもあり, ケースワーク・サービスの効果を高める上で不可欠な要素でもある. しかし, <u>クライアントのもつこの権利は必ずしも絶対的なものではない</u>. なお, クライアントの秘密は同じ社会福祉機関や他機関の他の専門家にもしばしば共有されることがある. しかし, この場合でも, 秘密を保持する義務はこれらすべての専門家を拘束するものである.</p> <p>Principle 7: CONFIDENTIALITY</p> <p><u>Confidentiality</u> is the preservation of secret information concerning the client which is disclosed in the professional relationship. Confidentiality is based upon a basic right of the client; it is an <u>ethical obligation</u> of the caseworker and is necessary for effective casework service. <u>The client's right, however, is not absolute</u>. Moreover, the client's secret is often <u>shared with</u> other professional persons within the agency and in other agencies; the obligation then binds all equally.</p>

出典 : フェリックス・P・バイスティック (1996) 『ケースワークの原則 (尾崎他訳)』 誠信書
 164&190 および Biestek, F. P. (1957) *The Casework Relationship*, Chicago, Illinois:
 Loyola Univ. Press, p.103 & p.121.

《あなたのキーワードを探しましょう》

気づきと学びのコメント：

- (1) 理解（音読の感想も含む）
- (2) マイクロ技法との関連性
- (3) 実践事例への応用

《あなたのキーワードは探せましたか》

参考資料：授業開始前のリラクゼーション（試行錯誤の試み）

今回のコロナ禍における、オンデマンド形式の授業形態で試みた思い出・懐かしのリラクゼーション課題の体験（多様なライフコース上の出会い・交わり・別れ・旅立ち：①ライフイベント②自分自身③家族メンバー④地域社会・ソーシャルネットワーク等との交互作用体験）

出会いの体験課題	体験からの気づきと学び	例) リラクゼーションの導入部分
(1) 思い出の <u>音楽</u> と絆 ①ライフイベントとの出会い ②自分自身との出会い		《周りの環境を整え、思い出と一緒に感じましょう》 あなたの周りの環境はいかがですか？落ち着いておりますか？心地よいお部屋になっておりますか？少しの間、机から離れて、『ほっと』してみましょ。横になっても良いですよ。 まず、やさしく目を閉じましょ。目を閉じて、優しくまぶたを手のひらでゆっくりと撫でてください。心地よい手触りを感じてください。 ・・・・(省略)・・・
(2) 懐かしの <u>味わい</u> と絆 ①ライフイベントとの出会い ②自分自身との出会い		それでは、これまでの人生を少し振り返りましょ。今回は音楽にしましょ。印象に残っている、気持ちが良くなる、しかもリラックスできる音楽、あなたが好きな音楽を思い出してください。どの曲でしょうか？ゆっくりと少し口ずさんでみましょ。いかがでしょう？いろいろな出来事が思い出されたでしょう。
(3) 思い出の <u>写真</u> と絆 ①家族メンバーとの出会い ②地域社会との出会い（ソーシャルネットワーク）		この豊かな気持ちを味わいましょ。 この豊かな気持ちを味わいましょ。
(4) 懐かしの <u>絵本</u> と絆 ①家族メンバーとの出会い ②地域社会との出会い（ソーシャルネットワーク）		この豊かな気持ちを味わいましょ。 この豊かな気持ちを味わいましょ。

資料：ジャーメイン & ギッターマンの「ライフモデル」に関する各種の重要概念と出会う：京都国際社会福祉センターにおける「援助専門職講座」（1988）等における各種教材等を参考に、筆者が試案として融合・改変する）。

(4) ソーシャルワーク実践を効果的に実践するためのマイクロ面接技法

実践場面を充実するための技法の一つが、マイクロ技法である。前述の『ケースワークの原則』と密接な関連性を有している技法である。本授業では、この技法を中心に援助コミュニケーション論を紹介する。これもまた、いろいろな形で、ソーシャルワーク実践に導入されて久しい。技法 1：アテンディング・ビヘービヤ、技法 2：開かれた質問他、技法 3：感情の反射、技法 4：要約、技法 5：指示、技法 6：自己表出、技法 7：解釈、技法 8：誠実さと尊敬、技法 9：具体化、技法 10：即時性、技法 11：直面、その他である。

表 6：マイクロ技法の概観（試訳）

Basic Microskills 基礎的マイクロ技法	
Orientation 全体的流れの理解	<u>Clarify the role</u> of the social worker and the <u>purpose</u> of the social work interview. ソーシャルワーカーの <u>役割</u> とソーシャルワーク面接の <u>目的</u> の <u>明確化</u>
Attending 関わり行動	Use <u>eye contact</u> , <u>body language</u> , and <u>verbal tracking</u> to provide encouragement and understanding. 勇気づけや理解を促進するための <u>アイコンタクト</u> , <u>非言語</u> , <u>言語</u> の活用方法
Open and Closed-Ended Questions 開かれた質問方法, 閉じられた質問方法	Use open-ended questions to draw out the <u>client's story</u> . Use closed-ended questions to seek detail and to increase the structure of the <u>interview</u> . <u>クライアントの語り</u> を促すための開かれた質問方法の活用 面接を詳細化し、構造化するための閉じられた <u>質問方法</u> の活用
Reflection of Feelings 感情の反映・反射	Briefly restate the content discussed by client <u>to validate the feelings and to demonstrate active listening</u> . 傾聴技法を用い、クライアントによって話された事項に付随する <u>気持ちに関する意味づけ</u> を短く言い換え・再提示する
Reflection of Content (Paraphrase) 内容の反映（言い換え）	Briefly restate the content discussed by client <u>to validate the story and to demonstrate active listening</u> . 傾聴技法を用い、クライアントによって話された事項に付随する <u>内容に関する意味づけ</u> を短く言い換え・再提示する
Summarization 要約	<u>Organize a section of content</u> by synthesizing the content and moving the interview forward. 面接の内容を統合し、かつその面接を促進させるために、あるセクションの <u>語りの内容を精査</u> する

Source: Boyle et al., 2009; Ivey et al., 2010; Shulman, 2009.

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) *Applying Theory to Generalist Social Work Practice*. New Jersey: Wiley, p.24.

《あなたのキーワードを探してみましょう》

表 7：マイクロ技法の概観（試訳）

Advanced Microskills 上級マイクロ技法	
Confrontation 対決・対峙・直面	Observe and <u>point</u> out <u>contradictions</u> within the interview to increase understanding. 理解を深めるために、その面接内での <u>矛盾点</u> を観察し、かつその矛盾を <u>指摘</u> する
Communication of Feelings and Immediacy 感情を込めた親密さを基調とするコミュニケーション	<u>Share</u> with the client the <u>social worker's concerns</u> about the situation and the direction of the case. ソーシャルワーカーが、その事例の状況や方向性に関し、 <u>真摯に向き合おう</u> としていることをクライアントと <u>分かち合</u> <u>う</u>
Interpretation 解釈	<u>Share</u> a <u>tentative observation</u> with the client about what the social worker is <u>seeing</u> in the case. ソーシャルワーカーが、その事例の中で <u>見出した事項</u> に関し、クライアントと <u>分かち合</u> <u>う</u>
Information Sharing 情報の共有	<u>Provide information</u> to the client to facilitate a referral, increase understanding, or develop a new skill. クライアントに、送致を促し、理解を深め、あるいは新たな技法が育めるように、 <u>情報を提供</u> する
Use of Self	Use the professional relationship to prompt change in thinking and behavior, possibly including <u>professional use of self-disclosure</u> . <u>自己開示</u> に関する <u>専門職的技法</u> といった技法を活用し、クライアントが持っている考え、行動上の変化を促す

Source: Boyle et al., 2009; Ivey et al., 2010; Shulman, 2009.

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) *Applying Theory to Generalist Social Work Practice*. New Jersey: Wiley, p.24.

《あなたのキーワードを探してみましょう》

これまで、基本枠組みおよびその基礎理論を簡単に整理してきた。特に前述の項目(3)と(4)は、密接な関連性があると考えられる。ソーシャルワーク実践の具体的な展開方法では、この組み合わせが重要となる。ケースワークの原則を具体化する技法は、マイクロ技法に内包されている。

最近、クララ・ヒルの原著が日本語に翻訳されている(2015)；『ヘルピング・スキル(第2版) 藤生英行監訳』金子書房。大変貴重な著作であり、今後はこの著書の熟読も必須といえる。クララ・ヒルの著書からの学びとは、(1)探究段階(クライアント中心主義)(2)洞察段階(精神分析的理論・対人(対象)関係理論)(3)行動段階(行動理論・認知理論)の3段階の構成であり、ユニークな統合論的理論背景である。本著書は、バイステックが提示する援助関係を構築するための7つの原則とマイクロ技法との関係性を統合するためのヒントをわれわれに提供している。表8と表9は、その分析シートである。未完であるが、今後活用方法を構築する予定である。

表 8 : クロスマップ I (マイクロ技法 : Ivey, A.E. & ケースワークの原則 : Biestek, F.P.)

原則 マイクロ技法	1. 個別化の原則：クライアントを個人として捉える	2. 意図的な感情表現の原則：クライアントの感情表現を大切にする	3. 統制された情緒的関与の原則：援助者は自分の感情を自覚して吟味する
アテンディング・関わり行動			
開かれた質問・閉じられた質問			
感情の反射・反映			
要約技法			
明確化技法			
焦点化			
解釈			
対決技法			
その他 1			
その他 2			

資料：フェリックス・P・バイステック（2015）『ケースワークの原則（尾崎新他訳）』誠信書房
 アレン・E・アイビー（1990）『マイクロカウンセリング（福原真知子他訳）』川島書店
 クララ・E・ヒル（2015）『ヘルピング・スキル（第2版）藤生英行監訳』金子書房等を参考に
 する。

《ちょっとチャレンジしてみましょう：新たな発見は？》

表 9： クロスマップⅡ（マイクロ技法：Ivey, A.E.&ケースワークの原則：Biestek, F.P.）

原則 マイクロ技法	4. 受容の原則：受け止める	5. 非審判的態度の原則：クライアントを一方向的に非難しない	6. 自己決定の原則：クライアントの自己決定	7. 秘密保持の原則：秘密を保持して信頼感を醸成する
アテンディング・関わり行動				
開かれた質問・閉じられた質問				
感情の反射・反映				
要約技法				
明確化技法				
焦点化				
解釈				
対決技法				
その他 1				
その他 2				

資料：フェリックス・P・バイステック（2015）『ケースワークの原則（尾崎新他訳）』誠信書房
 アレン・E・アイビー（1990）『マイクロカウンセリング（福原真知子他訳）』川島書店
 クララ・E・ヒル（2015）『ヘルピング・スキル（第2版）藤生英行監訳』金子書房等を参考に
 する。

《ちょっとチャレンジしてみましよう：新たな発見は？》

3. 『相談援助の理論と方法 I』の全体的な流れ

本科目では、ソーシャルワーク実践の展開を中心に、その体系と内容、理論と技術を学ぶ。より具体的には、(1) 日本における社会・経済状況の把握と課題、(2) ソーシャルワーク実践における焦点（人と環境との相互作用の理解）、(3) ソーシャルワーク実践の対象、(4) ソーシャルワーク実践過程、(5) 実践活動に関連する知識と技術、(6) 事例分析の基本、(7) ソーシャルワーク実践が直面する将来的課題である（岩間・白澤・福山他，2010&2013；その他）。授業で活用する主要参考図書は、上記事項に留意して効果的に編集されている。本授業でもこうした流れを踏襲する。

講義方法としては、以下のような点に留意して授業を展開している。クラスは、ゆるやかなグループ（班）編成にて、各班のメンバーとの共同学習体験を基盤に、その学びを深めていく。ソーシャルワーク実践の基本は、各種専門職との連携プレーが重要である。本クラスでは、こうした連携および協働する心を育む体験を重視している。履修者全員には、提示される課題に積極的に取り組む姿勢が求められる。また、本授業では、各班メンバー相互とのディスカッション、全体クラスでの発表など履修者が、積極的に授業に参加できるようなクラス運営を心掛けている。テキストは特に指定しないが、以下の図書を中心に講義を展開する。

- (1) 岩間・白澤・福山編著（2010&2013）『ソーシャルワークの理論と方法 I』ミネルヴァ書房
- (2) 久保絃章・副田あけみ編著（2009）『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店
- (3) 社会福祉士養成講座編集委員会（2013）『相談援助の理論と方法 I』中央法規
- (4) フェリックス・P・バイステック（2015）『ケースワークの原則（尾崎新他訳）』誠信書房
- (5) アレン・E・アイビー（1990）『マイクロカウンセリング（福原真知子他訳）』川島書店
- (6) クララ・E・ヒル（2015）『ヘルピング・スキル（第2版）藤生英行監訳』金子書房
- (7) Kanfer, F.H., Schefft, B.K. (1988). *Guiding the Process of Therapeutic Change. Campaign, III.: Research Press.*
- (8) カレン K. カースト・アッシュマン(2007) 『マクロからミクロのジェネラリストソーシャルワーク実践の展開（宍戸明美他監訳）』筒井書房

2021 年度より、社会福祉士等の受験資格に関するカリキュラムが改訂されるが、その内容をどのように講義に導入するか、現在試行錯誤の状況である。ジェネラリストソーシャルワーク実践に基盤をおく、ソーシャルワーカー養成の課題は、次世代のソーシャルワーク教育に携わる人々にバトンを渡すことになるが、社会福祉実践現場、社会福祉実習を中心にした教育カリキュラムであって欲しい。理論と実践の統合とは何かを再度、考える機会となっている。ソーシャルワーク実践援助機関が、大学の授業に効果的に影響を与えるための仕組みと試みが必要である。教育内容の共有化は勿論、人材の交流、財源の共同化等、多様な課題が想定されるが、あくまでも実践領域・現場が中心であることを忘れてはいけない。大学の教育現場においては、対面型授業は基本である。しかし、今後は、オンライン授業、オンライン実習等の新たな授業形態も模索すべき時期が来ている。

(1) パート I : ソーシャルワーク実践 (相談援助) の成り立ちと基本枠組みの理解

パート I では、本科目の全体的な把握を目的とする。今日特に取り上げていかなければならない社会問題の現状把握、それに対応する社会福祉施策、並びに支援方法論の枠組みと具体的支援技法の提示を目標とする。また、ソーシャルワーク実践を統合的に理解、把握するためのジェネラリストソーシャルワーク論にも触れる。パート I の具体的なクラス日程は、表 10 である。

表 10 : 相談援助の理論と方法 I の日程

パート I ソーシャルワーク実践 (相談援助) の成り立ちと枠組みを理解する	
① 04 月 15 日 本科目の全体像の説明：クラス運営について (班編成について) ② 04 月 22 日 ソーシャルワークの理論と方法 (1) (序章) (例) : 豊中社協 (CSW 勝部礼子 : NHK プロフェッショナル : 字幕なし) ③ 04 月 29 日 ソーシャルワークの理論と方法 (2) (第 1 章)	図 1 ~ 図 5, 表 1 ~ 表 9 等を適宜配布し, 視覚的にもその具体的な内容とその関連性を把握できるように講義を進める。

現代社会における家族が直面している問題の理解を中心に講義を進める。家族を取り巻く地域社会の経済、産業、所得等の変化は著しく、家族が直面する問題は多様である。日本全体における地域、産業、職場等の社会環境の変化は著しい。産業化、都市化、環境、経済、雇用、収入、住居、ジェンダー、その他における変貌は、その一部である。

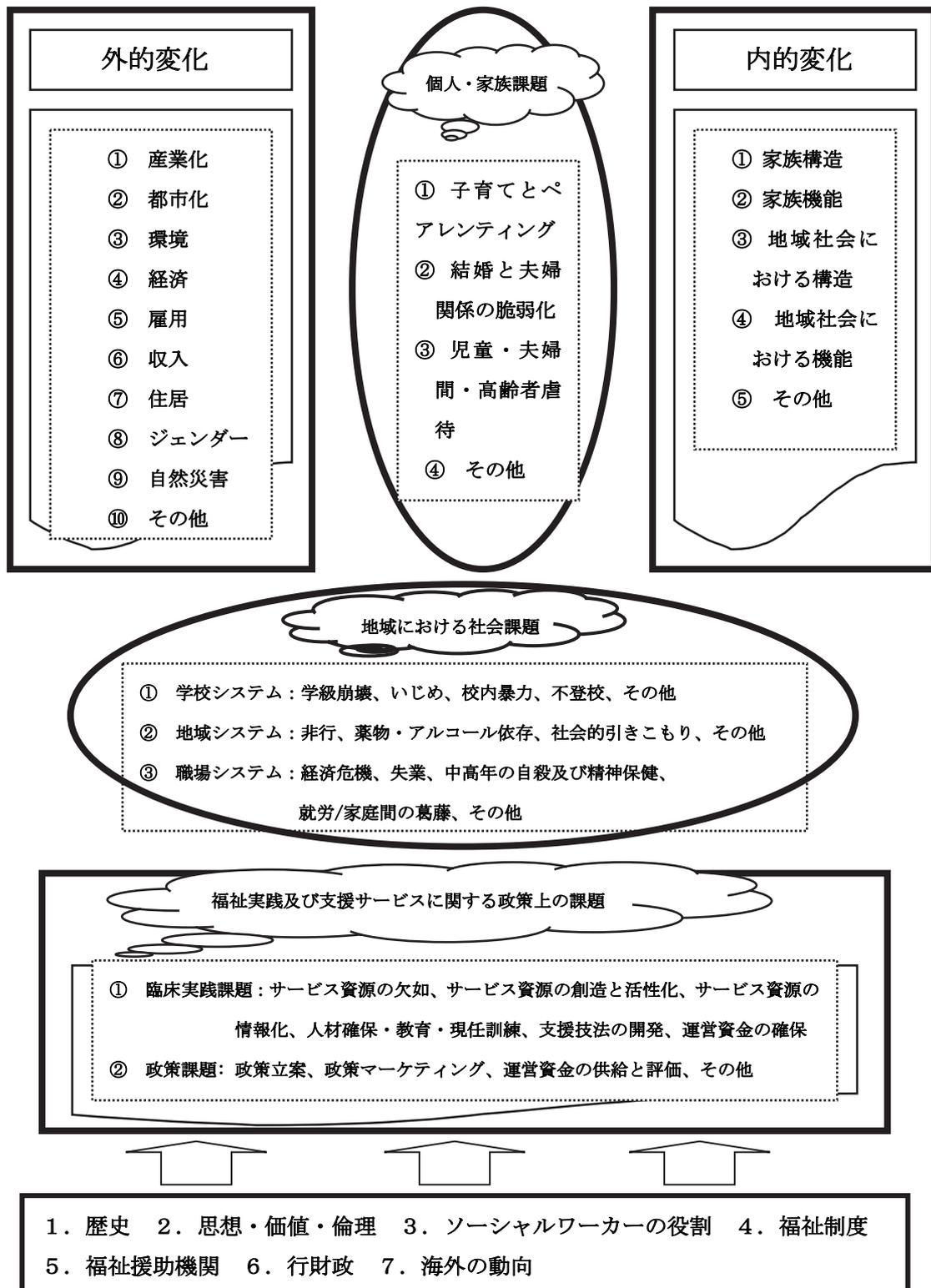
また、自然環境の変化にも注目せざるをえない。自然災害大国である日本では、東北関東大震災、阪神大震災、台風による水害や火災等からの影響もその変貌に拍車をかける重要な要因となっている。災害の特定が困難で、未知の対応が必要な原発事故や新型コロナウイルス問題をはじめ、多様な災害や事故に起因する新たな社会問題にもソーシャルワーク実践は注視、取り組むべき時代となっている。

上記のこうした社会・自然・環境上の変化と変貌は、密接に家族生活と連動している。より具体的には、家族構造、家族機能、地域社会における構造、地域社会における経済、雇用、教育、保健・医療等の諸機能に与える影響は顕著といえる。

本科目のパート I では、このような社会、経済、地域、家族変化を考慮し、ソーシャルワーク実践の役割、課題を履修者とともに考察する。これらの変化がもたらす社会・経済・地域・家族システムが直面する課題の理解を深める。具体的には、図 2 ~ 図 5 の現状等を各種のデータを活用し、かつその資料を分析しつつ、より効果的な支援方法を考える。適宜下記のような白書等のデータ資料も活用、社会全体の動向も把握する。

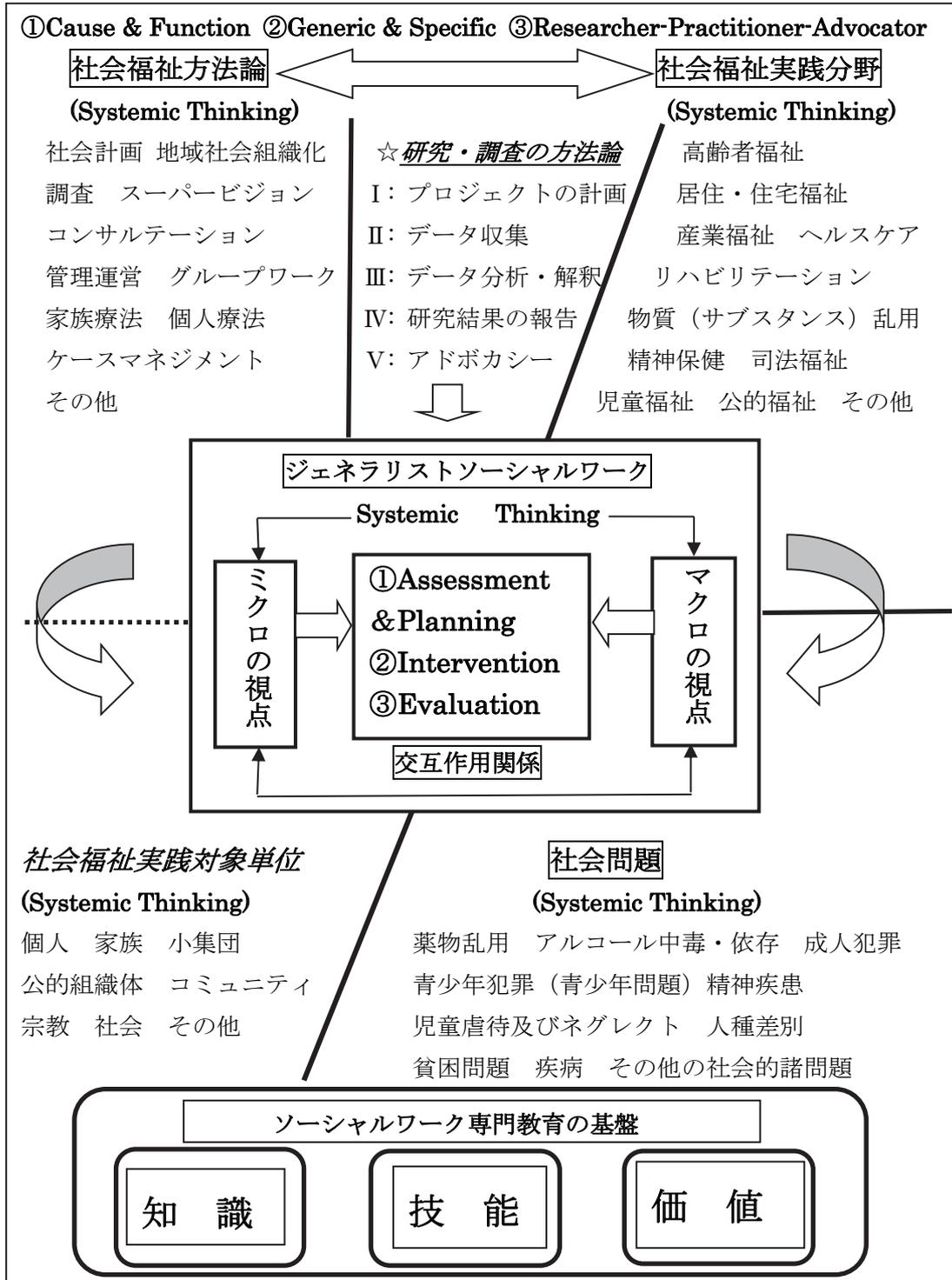
- (1) 愛育研究所 (2001~2019) 『日本子ども資料年鑑』 KTC 中央出版
- (2) 日本医療ソーシャルワーク研究会 (2019) 『医療福祉総合ガイドブック』 医学書院
- (3) その他 : 厚生労働白書 少子化社会対策白書, 子供・若者白書, 交通白書 災害白書等の白書関係資料

図2：ソーシャルワーク実践が取り組む生活課題（個人・家族・地域・社会）



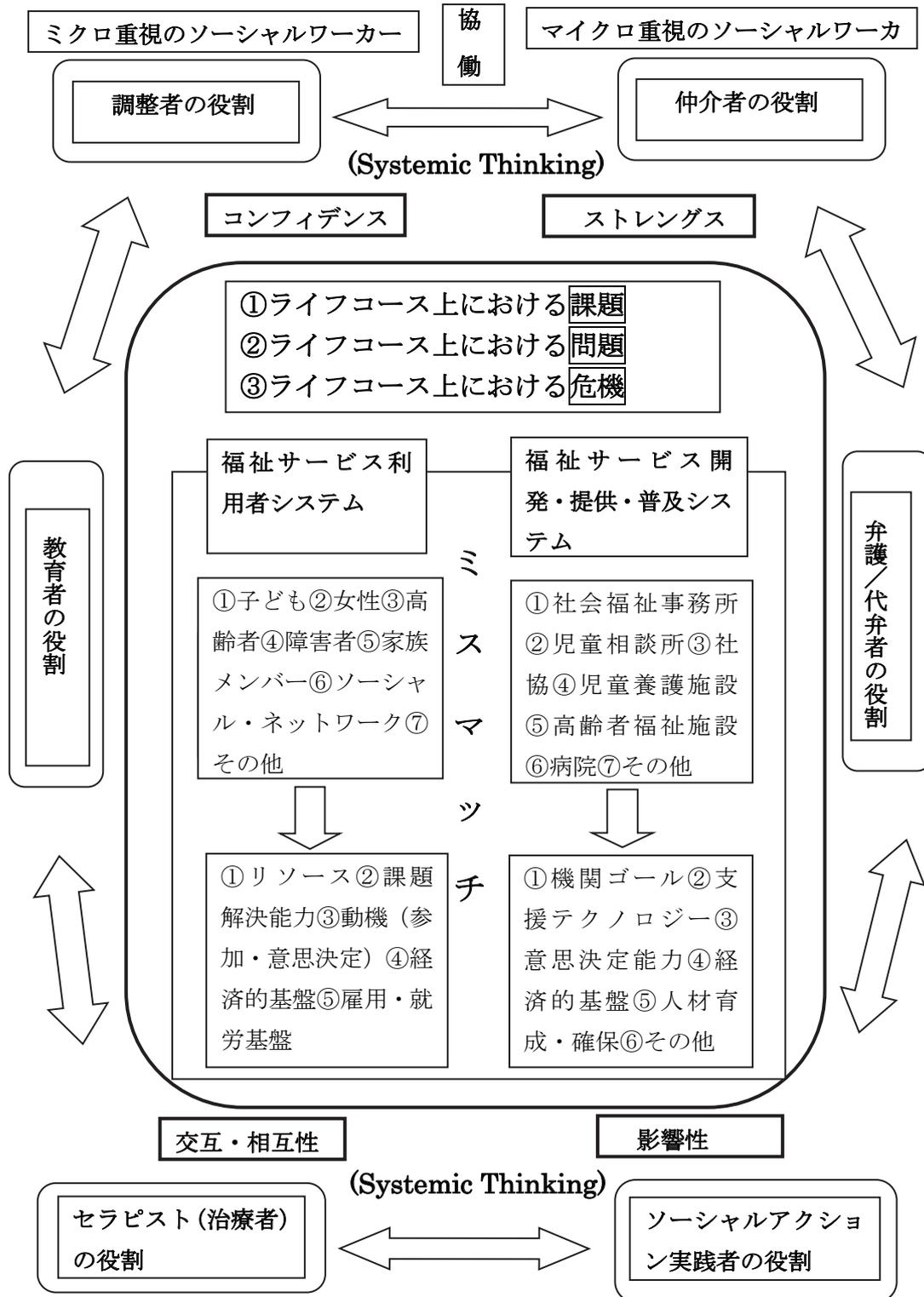
出典：佐々木（2015）「児童・家庭を取り巻く状況と福祉ニーズ」『児童家庭福祉論』全国社会福祉協議会編 p.38 を一部変更する。

図3：ジェネラリストソーシャルワーク実践・理論のための羅針盤モデル（試案）



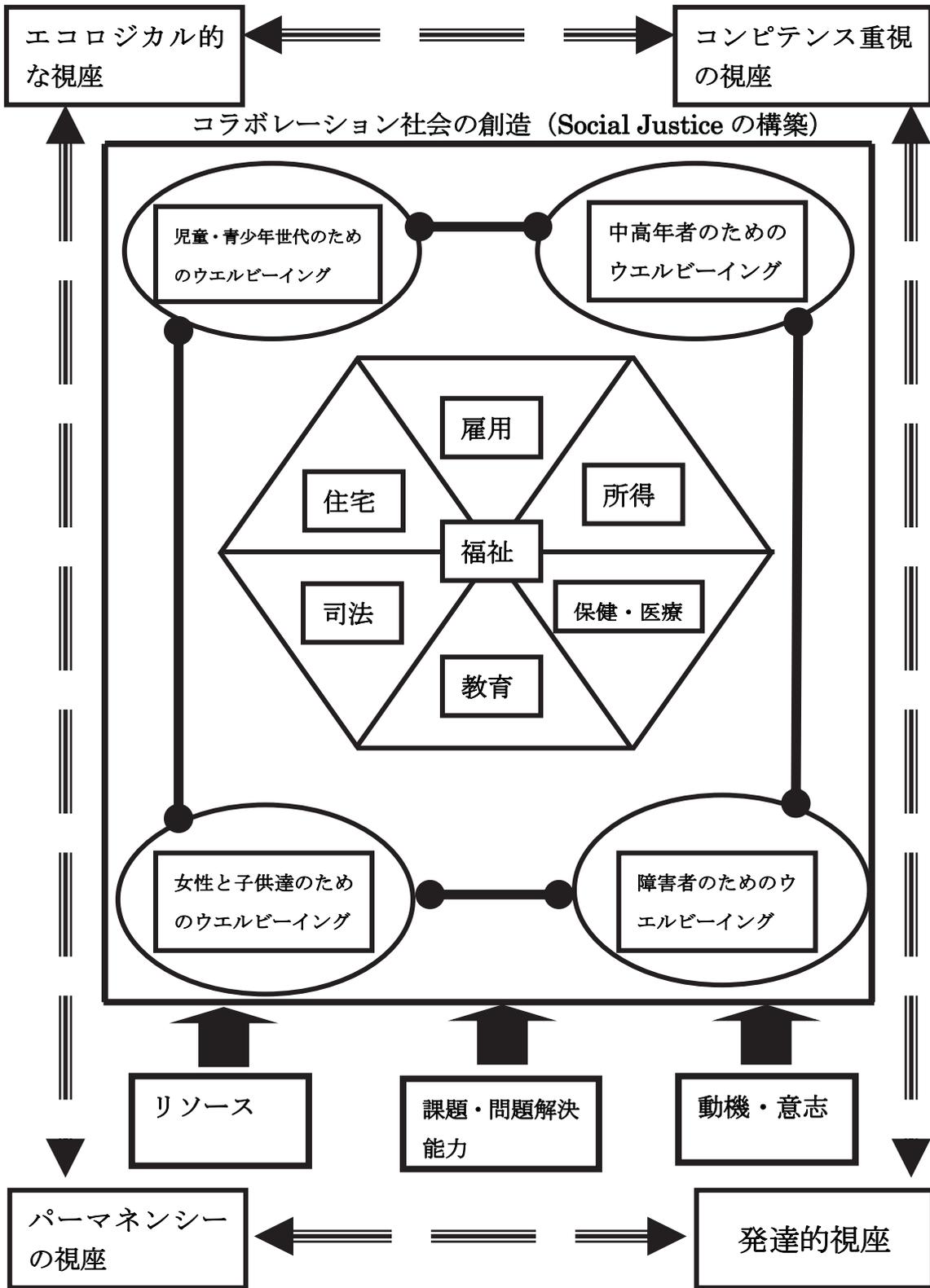
出典: Nancy K. Carroll, "Three-Dimensional Model of Social Work Practice," *Social Work* 22 (September 1977), p. 431 及び Popple, P.R. & Leighninger L. (2005&2008). *Social Work, Social Welfare, and American Society* (6th & 7th edition). p. 97 & p.88, Boston, Pearson Education, Inc.& 北島英治 (2008) 『ソーシャルワーク論』 ミネルヴァ書房 p.58 を参照に、筆者が試案として一部改変する。

図 4：ジェネラリストソーシャルワーカーの主要な役割（試案）



出典：佐々木・林（2005）「解題：ファミリーグループ・カンファレンスの挑戦」『ファミリーグループ・カンファレンス（高橋重宏監訳）』有斐閣 p. 205 を一部改変

図5：現代社会におけるソーシャルワーク実践の目標と意義（試案）



資料：佐々木（1999）および Pecora et al., (2000)などを参考に，一部変更し筆者が作成する。

活用する参考文献は、以下のとおりである：

参考文献

1. 北島英治 (2002) 「ソーシャルワークの歴史」『ソーシャルワーク実践の基礎理論』(有斐閣) 第 11 章 306–338
2. 大島侑・佐々木政人編著 (2000) 『社会福祉援助技術論』(ミネルヴァ書房) 第 1 章 8–35 及び第 2 章 36–74
3. 太田義弘・佐藤豊道 (1984) 『ソーシャル・ワーク』(海声社) 第 1–4 講 2–29
4. 岩間伸之他編著 (2010 & 2013) 『ソーシャルワークの理論と方法 I』ミネルヴァ書房
5. 白澤政和他編著 (2015) 『相談援助の理論と方法 I』中央法規
6. フェリックス・P・バイステック(2015) 『ケースワークの原則 (尾崎他訳)』誠信書房
7. アレン・E・アイビー (2010) 『マイクロカウンセリング (福原真知子他訳)』川島書店
8. 佐々木政人 (2015) 「児童・家庭を取り巻く状況と福祉ニーズ」『児童家庭福祉論』全国社会福祉協議会編 第 2 章 38

その他の参考文献 1 (日本)

- 空閑浩人 (2016) 『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房
- 小松源助 (1993) 『ソーシャルワーク理論の歴史と展開』川島書店
- 佐藤豊道 (2001) 『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店
- 全米ソーシャルワーカー協会 (1993) 『ソーシャル・ケースワーク：ジェネリックとスペシフィック (ミルフオード会議報告) (竹内一夫他訳)』相川書房
- カレル・ジャメーン他 (1992) 「ソーシャルワークの新しい波 (第 1 章 1–22) 及び「治療モデルから生活モデルへ (第 9 章 183–220)」『エコロジカルソーシャルワーク (小島蓉子編訳・著)』学苑社
- メアリー・E・リッチモンド (2012) 『社会診断 (杉本一義監修・佐藤哲三監訳)』あいり出版

その他の参考文献 2 (海外)

- Germain, C. B. & Gitterman, A. (1980). "8. Social Work Practice and Its Historical Traditions." In *The Life Model of Social Work Practice* (pp. 343-368). New York: Columbia Univ. Press.
- Germain, C. B. & Gitterman, A. (1995). "1. The Ecological Perspective & The Life Model of Social Work Practice: A Brief Overview " In *The Life Model of Social Work Practice* (Second Edition; pp. 5-59). New York: Columbia Univ. Press.
- Mattaini, M.A. , Lowery, C. T. & Meyer, C.H. (1998). *The Foundations of Social Work Practice* (Second Edition). Washington,DC: NASW Press.
- Meyer, C.H. (1983). *Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*. New York: Columbia Univ. Press.

(2) パートⅡ：ソーシャルワーク実践のプロセス理解

パートⅡでは、ソーシャルワーク実践における援助過程の学びである。インテーク、アセスメント、プランニング、インターベンション、エバリュエーション、ターミネーション、アフターケアである。福祉実践領域に共通する援助過程の基礎を学ぶ。本科目では、その援助過程を大きく以下の3段階に分けて（①出会いの時期：インテーク、アセスメント、②交わりの時期：プランニング、インターベンション、③旅立ちと別れの時期：エバリュエーション、ターミネーション、アフターケア）、援助の基本を解説する。援助過程全般に共通する援助の原則と支援技法は、前述のとおり、①バイステックの『ケースワークの原則』と②アイビー他の『マイクロ技法』である。エコマッピング技法、ジェノグラム等のマッピング技法は、適宜紹介する（表 15）。

表 11：相談援助の理論と方法Ⅰの日程

パートⅡ ソーシャルワーク実践のプロセス理解（出会い：交わり：別れと旅立ち）	
④	05月13日 ソーシャルワーク過程（1）：導入期&事前アセスメント （第2章）ライフコース ライフサイクル・マトリックス法等の紹介
⑤	05月20日 ソーシャルワーク過程（2）：導入期&事前アセスメント （第3章）ジェノグラム エコ・マップ ジェノマップ等の紹介
⑥	05月27日 ソーシャルワーク過程（3）：支援計画の作成と実施 （第4章）ペアレント・トレーニング法 家族療法の技法等の紹介
⑦	06月03日 ソーシャルワーク過程（4）：評価・終結 （第5章）シングル・システム・デザインおよびその他の評価法の紹介

ソーシャルワーク実践の援助過程には、多くの研究者、実践家により理論化されている。授業では、岩間・白澤・福山編著（2010&2013）『ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ』ミネルヴァ書房を活用する。また、補助教材資料も適宜提供する。特に、①ヘッパース&ラーセン（Hepworth, D.H. & Larsen, J.A.）の理論を基盤（3段階支援プロセス）に、②クライアント中心のアプローチ法、③認知行動理論の援助方法論を紹介し、北米のソーシャルワーク実践の原点を学生と共有する。活用する資料は、表 12, 表 13, 表 14, 表 15, 表 16, 表 17, 表 18, 表 19, 表 20 である。取り上げる各種の資料は、原著書（英文）との関連性もあり、筆者が適宜、選択し、試訳を付記している。受講者からの質問等は、筆者の日本語の表現能力の拙さを実感する貴重な機会でもある。

これらの補助教材資料は、ソーシャルワーク実践、現場実践の少ない筆者はもとより、学生の臨床経験を補う効果を持っている。また、こうした資料に、あえて原典である英語も交えている。原著に触れる喜びを共有できる機会の醸成と今後大学院等で、学ぶ契機となれば嬉しい。

課題は、提示する理論的背景の異なる多様なアプローチやモデル、さらにはそのモデルの特徴的な技法や技術をどのように統合化するか、その課題はさらに複雑である。多くの混乱が想定されるが、試行錯誤の段階である。

補助教材資料①：ヘッパース&ラーセン (Hepworth, D.H. & Larsen, J.A.) の理論基盤（3段階支援プロセス）

本資料は、近年、日本語翻訳も出版されている（武田・北島監修・訳，2017）。特に、アセスメント段階、介入段階での学びは大きい。また、家族問題を中心とするユニットへのアプローチ法として、家族中心ソーシャルワークの基盤に関する知見を豊富に含んでいる。さらには、前述のとおり、援助関係の構築を重要視し、今日古典ともなっているアレン・アイビー等のマイクロ技法をはじめ、クララ・ヒルからの学びとも呼応している。（1）探究段階：傾聴，開かれた質問，言い換え，感情の反映，（2）洞察段階：挑戦，解釈，自己開示，即時性，（3）行動段階：行動段階のスキル，行動段階のステップ等にも注目したい。マイクロソーシャルワークの視点に関する援助技法が網羅されている。今後は、地域を中心としたアプローチやサービス利用者の声をマクロの社会政策へ繋げる試みが必要であり、マクロの視点も念頭に入れた支援課題と連動する作業は重要といえる（カレン K. カースト-アッシュマン，2007）。

表 12：ヘッパース&ラーセンの3段階の援助プロセス（試訳）

第一段階: サービス利用者との出会い(探索, アセスメント, 及び計画)	Phase I : (Exploration, Assessment, and Planning)
1. <u>ラポール</u> を築く (的確なウォームアップ期間を活用する)	1. Establishing <u>rapport</u> (using appropriate warm-up period)
2. クライエントの自主性に注目しつつ、クライアントが <u>現在位置</u> している場所からスタートする	2. Starting where the client <u>is</u>
3. クライエントの問題及び <u>エコロジカル的</u> 背景を探索する: 課題を探究, 焦点化, クライエントが求める危機的 (重大な) 問題に関する情報を収集する	3. Exploring the client's problem and the <u>ecological context</u> : exploring problem in depth, maintaining focus, eliciting information needed to answer critical questions
4. クライエントの <u>情緒的な反応</u> に呼応する	4. Responding to clients' <u>emotional reactions</u>
5. 問題が, <u>機関の機能</u> (目的, 資源, 及びクライアントのサービスに関する有資格性) に合致しているかどうかを決定する	5. Determining if problems match <u>agency's function</u>
6. 必要とされる援助機関への <u>送致</u>	6. Making <u>referrals</u> when indicated
7. 文化的な要件に配慮し, 援助過程に対するクライアントの <u>期待</u> を探索する	7. Exploring clients' <u>expectations</u>
8. <u>不完全な動機</u> を成長させる	8. Enhancing <u>deficient motivation</u>
9. <u>多様な視点からのアセスメント</u> を構成する	9. Formulating a <u>multidimensional assessment</u>
10. 目標を協議し, <u>優先順位付け</u> をする	10. Negotiating goals and <u>ranking</u> them by priority
11. <u>役割</u> を明確にする	11. Defining <u>roles</u>
12. 変化に向けた合意手段を含む <u>契約</u> をする	12. Formulating a <u>contract</u>

出典：Hepworth, D.H. & Larsen, J.A. (1993). *Direct Social Work Practice*. Cal.: Brooks/Cole Publishing Company, p.51.

《あなたのキーワードを探してみましょう》

表 13：ヘッパース&ラーセンの 3 段階の援助プロセス（試訳）

第二段階: サービス利用者との交わり(実施及び目標達成)	Phase II (Implementation and Goal Attainment)
1. 目標をサブ・ゴールと課題とに <u>細分化</u> する	1. <u>Partializing</u> goals into sub-goals and tasks
2. <u>介入方法</u> を選択し、かつ実施する	2. Selecting and implementing <u>interventions</u>
3. <u>課題実施</u> に関する計画を作る	3. Planning <u>task implementation</u>
4. <u>セルフエフィカシー</u> を醸成する	4. Enhancing <u>self-efficacy</u>
5. セッションの <u>焦点</u> を保持・維持する	5. Maintaining <u>focus</u> within sessions
6. セッション間の <u>継続性</u> を保持・維持する	6. Maintaining <u>continuity</u> between sessions
7. <u>進捗状況</u> をモニターする	7. Monitoring <u>progress</u>
8. 共感技法や関係性の反応制御技法を駆使しクライアントの <u>気づき</u> を高め、さらには対決法や他の技法も導入しつつ、変化に対する様々な <u>(心理的)抵抗(感)</u> を解消する	8. Resolving barriers to change: enhancing <u>awareness</u> by employing additive empathy, managing relational reactions, resolving <u>resistances</u> to change by employing confrontation and other techniques
9. 変化を促進するための適切な <u>自己開示</u> や <u>自信保持</u> のための方法を導入する	9. Employing <u>self-disclosure</u> and <u>assertiveness</u> to facilitate change

出典：Hepworth, D.H. & Larsen, J.A. (1993). *Direct Social Work Practice*. Cal.: Brooks/Cole Publishing Company, p.51. ≪あなたのキーワードを探してみましよう≫

表 14：ヘッパース&ラーセンの 3 段階の援助プロセス（試訳）

第三段階: サービス利用者との別れ(評価及び終結)	Phase III (Termination and Evaluation)
1. 終結のための <u>レディネス(準備状況)</u> を評価する	1. Evaluating <u>readiness</u> for termination
2. 政策(原則)や課題(問題)に留意して終結のための計画を <u>協働</u> して作る	2. <u>Mutually</u> planning termination
3. ワーカー・クライアントの関係性を <u>肯定的に終結</u> するための努力をする	3. Effecting <u>positive termination</u> of relationship
4. <u>変化と今後の成長</u> を保持・維持する戦略方法(手立て)を計画する	4. Planning strategies to maintain <u>change</u> and continued <u>growth</u>
5. <u>結果</u> を評価する	5. Evaluating <u>results</u>
6. <u>フォローアップ</u> 評価を実施する	6. Conducting <u>follow-up</u> evaluation

出典：Hepworth, D.H. & Larsen, J.A. (1993). *Direct Social Work Practice*. Cal.: Brooks/Cole Publishing Company, p.51. ≪あなたのキーワードを探してみましよう≫

危機理論の理解も重要である。危機理論については、筆者の研究ノートにゆずる（「家族援助論」『福祉貢献学紀要』愛知淑徳大学 第 10 号 2020 年 28-50）。コロナ対策、原発事故、自然災害に対する予防的な取り組みを含む、危機介入の技法の提示も重要である。また、ジェノグラムやエコマップに代表される、ソーシャルワーク援助のマッピング技法についての活用方法に関する資料の提供も適宜実施している（表 15）。

表 15：ジェノグラム&エコマップ（ジェノマップ）の説明（試訳）

家族名： _____

作成者&日時： _____

エコマップⅠ：定義

エコマップは、クライアントやその家族を社会的な社会状況や背景の中で捉える可視化マッピング技法である。多様な記号、あるいは短い用語を駆使し、家族や地域社会における相互作用関係を描写する。エコマップは、通常、ソーシャルワーカーとクライアントが協働で作成し、生態学的な視点での家族の位置する状況を共に理解するためのものである。

ジェノグラム：

ジェノグラムは家族の木（家系図）である。2世代あるいは三代目における家族の関係図である：

- (1) 年齢、性別、婚姻、世帯構成
- (2) 家族構造や関係性
- (3) 職場の状況、雇用、役割責任
- (4) 社会的活動、関心（趣味・余暇等）
- (5) 公的な仲間関係（教会・労働組合・サービスクラブ等）
- (6) 社会的相互関係に由来するサポート資源やストレス
- (7) 社会的資源の利用（医療保険、経済的支援、保健、精神保健、学校、医師等）
- (8) 私的資源や援助者（親戚、友人、近隣、自助グループ等）

エコマップⅡ：具体的な記述内容

- (1) 食糧、住居、移動、健康等の基本的な生活ニーズを確保できる収入を確保できているか？
- (2) 家族員は雇用されているか？
- (3) 仕事を楽しんでいるか？
- (4) 安全な場所に居住しているか？
- (5) 親戚・友人・近隣の人々との交流はあるか？
- (6) 社会・文化・宗教・地域の活動に参加しているか？
- (7) 家族の価値観、信念、生活様式は、その居住する近隣社会と葛藤の状況下であるか？
- (8) 子どもたちは教育資源にアクセスできているか？
- (9) 子どもたちは学校での生活を楽しんでいるか？
- (10) 高いレベルのストレスを感じている家族メンバーはいるか？

出典：Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (1994) *Techniques and Guidelines for Social Work Practice*, 3rd edition, Mass.: Allyn and Bacon, pp.267-270

補助教材資料②：クライアント（パーソン）中心理論

クライアント（パーソン）中心理論とソーシャルワーク実践との関係性は、貴重である。ソーシャルワーク実践への影響力は大きい。ソーシャルワーク実践におけるクライアントとソーシャルワーカーが共に築く信頼関係を構築する際には、欠くことのできない技法である。多くのソーシャルワーク実践教育に携わる教員が習得している教育方法論である。重要な理論的概念は以下のとおりである。

表 16：クライアント（パーソン）中心理論に関する概念（試訳）

Self-Actualization : 自己実現	A process of <u>growth</u> and <u>change</u> that culminates in achieving <u>personal fulfillment</u> : 個人的な充足感を達成するための成長と変化の過程
Incongruence : 不一致・齟齬	A state of <u>anxiety</u> , <u>dissatisfaction</u> , and <u>fear</u> resulting from problems in a <u>person's self-image</u> : 人が持っている自己イメージに関する問題から生起する不安, 不満足, 恐れの状態
Congruence : 一致	An integrated, positive self-image that allows people to <u>heal</u> , <u>grow</u> , and <u>move</u> toward fulfillment : 人間は, 統合された, 肯定的自己イメージをとおして, 癒され, 成長し, 充足感に満たされる
Unconditional Positive Regard : 無条件の肯定的評価	Sincere communication of <u>warmth</u> and <u>care</u> grounded in inherent self-work rather than conditions : 結果よりむしろ自己努力に起因する温かさやケアに根ざした心のこもったコミュニケーション
Empathy : 共感	The ability to accurately understand and demonstrate <u>genuine concern</u> for another person : 他者を正確に理解し, 純粋な関与ができる能力

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) p.123

表 17：クライアント（パーソン）中心理論に関する原則（試訳）

Principle 1: 原則 1	Personal and social problems occur when people are <u>devalued</u> : パーソナルで社会的な問題は, 人間が低く評価される際に生起する
Principle 2: 原則 2	<u>Change</u> happens in the context of an authentic <u>helping relationship</u> : 変化・変容は, 本来的な援助関係を背景として生み出される
Principle 3: 原則 3	People are capable of <u>self-actualization</u> when the conditions allow positive growth and change : 人間は, 肯定的な成長と変化が生まれる際に, 自己実現を可能とする

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) p. 126 《あなたのキーワードを探してみましょう》

なお、カールロジャーズは、ニューヨークローチェスターの児童ガイダンスクリニックの心理学者であり、オハイオ州立大学、シカゴ大学に奉職した日本でも著名なカウンセリング分野の第一人者である。来談者中心理論の構築者であり、マズロー、メイ、フロムらとともに実存主義とヒューマニズム論を展開した（Langer, C. L. & Lietz, C.A., 2015, p.123 & p. 126）。What's important in our lives? Why do human beings exist? What do they contribute to the world? は、今日のコロナ禍に揺れ動く 21 世紀の社会に対する先人たちからの問いかけでもある。信頼関係再構築の世紀であって欲しい（Payne, M., 2020, p.60）。

補助教材資料③：認知行動理論

また、筆者は、認知行動理論にも関心を持っている。後述する SST の援助との関連性も考慮して、ここでもその援助過程を具体化する。クライアントの動機をどのように高め、その動機を実際の生活場面で展開できるような行動レベルでのストレングスを構築するためのアプローチを提供する。2021 年度より、資料として、Kanfer, F.H., & Schefft, B.K.(1988): *Guiding the Process of Therapeutic Change*. Campaign, III: Research Press. (佐々木試訳) を導入し、より具体的な支援過程を提示する予定である。なお、カンファーらの基礎理論は、認知行動理論であり、その理論的把握に関する資料は、表 18, 表 19, 表 20 のとおりである。

表 18：カンファー等の 7 段階援助過程の目標（出会い：I～III）（試訳）

Phase：段階	Goals：目標
I. 役割構造の確立及びセラピー関係の構築	1. クライエントの <u>役割認知</u> を促す 2. 変化を促すための治療方法、実施上の規則、クライアント側の責任を含む、クライアントと治療者が果たす役割を明確化する 3. 治療継続を促進するための <u>動機を醸成</u> する 4. 治療に対するクライアントの忌避感を軽減し、さらには（治療者の言語的影響によって）、まず対象者のセッション内における治療行動を制御し、かつ徐々に <u>治療セッション以外の活動</u> をも制御できるような関係性を構築する 5. クライエントが保持している <u>隠れた思考行為</u> に沿いつつ、自動的な認知・行動反応に変化を与え、かつ仮説に基づいた、確認アプローチ法にシフトする

Phase：段階	Goals：目標
II. 変化のためのコミットメントの展開	1. 変化をもたらすには、士気を削ぐようなことを減少させ、自信を醸成する 2. 変化に対し、クライアントが <u>肯定的な結果</u> を意識できるように促す 3. クライエントが持っている目標や価値の明確化をとおして、彼の価値観や信念に基づいた <u>新たなオプション</u> を設定する 4. 変化のための新たなインセンティブを開発し、導入可能なオプションと限界性を模索する

Phase：段階	Goals：目標
III. 行動分析	1. 問題に関する定義を精緻化し、再定義をはじめ、その現状やさらには <u>希望する状況</u> を分析することに関わらせる 2. 目標と活用する方法に関し、残存する問題を解決するために必要なデータを収集する 3. セラピストが果たす役割、 <u>変化の促進に最適な資源</u> を再度検討する 4. 関連する機能的な関係性をはじめ、ターゲットの選択と治療処遇の選択の意義を吟味する

《あなたのキーワードを探してみましょう》

表 19：カンファーマ等の 7 段階援助過程の目標（交わり：IV～V）（試訳）

Phase：段階	Goals：目標
IV. 治療目標及び援助方法に関する合意形成	1. 問題領域と目標に関する <u>合意を形成</u> する 2. 変化を促すために <u>優先順位を作成</u> し、変化のための方法を明確にし、かつプログラムの流れを計画する 3. 変化を促す上での手順に入るための <u>契約に関する合意</u> をする

Phase：段階	Goals：目標
V. 治療の開始及びその動機の維持	1. 治療・処遇プログラム計画を実施する 2. ターゲットではない行動、あるいは人物に対する影響を評価する 3. 最初は、「学習補助」や問題解決アプローチ法に依拠することを奨励し、 <u>新たな行動</u> が自然になった段階で、徐々に各種のサポートを解除する

表 20：カンファーマ等の 7 段階援助過程の目標（旅立ちと別れ：VI～VII）（試訳）

Phase：段階	Goals：目標
VI. 進展状況に関する経過観察と評価	1. クライアントやその環境の変化をモニターする 2. 対処技法が増加、対象者やその他の人々に対する影響を評価する 3. データを活用し、その <u>進展度</u> を振り返り、 <u>強化</u> し、かつその目的や方法を再評価する 4. 変化を促す作業を促進、あるいは阻害する新たな「 <u>無理のない・自然な</u> 」再強化因子に注目する

Phase：段階	Goals：目標
VII. 効果の継続、一般化、および治療援助の終結	1. 新たな、将来的な問題状況に対応するための <u>自己マネジメント技法</u> を醸成する 2. 再発予防のための方策を講じておく 3. 治療・処遇を終了するための準備をし、他のサポートを構築し、あるいはもし必要ならば、そのサポートに変わるものを準備しておく 4. 過度の最小限の介入を避け、「 <u>クライアント役割</u> 」への <u>再強化を減少させる</u> 5. 新たな状況を受容できるように促し、治療的変化過程を終結する

出典：Kanfer, F.H., Schefft, B.K. (1988): *Guiding the Process of Therapeutic Change.*

Campaign, III: Research Press, pp.94-95. (試訳)

《あなたのキーワードを探してみましょう》

なお、前述のごとく、認知行動的療法に関する重要な援助過程は、表 18、表 19、表 20 で整理したとおり、次の 7 つの段階から構成されている：①役割構造の確立及びセラピー関係の構築、②変化のためのコミットメントの展開、③行動分析、④治療目標、および援助方法に関する合意形成、⑤治療の開始及びその動機の維持、⑥進捗状況に関する経過観察と評価、⑦効果の継続・一般化・および治療援助の終結、である (Kanfer, F.H., Schefft, B.K., 1988)。授業では、パートⅢで、後述する SST (学習モデル) や FGC モデル (調整モデル) などのより実践的で教育的な支援モデルの学びの基礎構造をここでも提示する。また、各種の相談援助系演習 (Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ) においても、こうした支援プロセスを、その教育内容に適宜組み込む努力をしている。さらには、事例分析を中心とした支援計画案作成など、実践的な介入方法や援助プロセスへの関連付けなど、その教育には多くの工夫が要請されている。より具体的で、実践的で、しかも体験的・教育的配慮が必須となっている。

活用する文献等は以下のとおりである：

参考文献

1. 大島侑・佐々木政人編著 (2000) 『社会福祉援助技術論』 (ミネルヴァ書房) 第 3 章 75—89
2. 久保紘章 (1986) 「ライフモデル」『臨床ケースワーク』 (武田健・荒川義子編：川島書店) 第 VIII 章 133—145
3. 岡堂哲雄 (1992) 「家族のライフコースと発達段階」『家族心理学入門』 (岡堂哲雄編：培風館) 第 7 章 85—95
4. 森岡清美・望月嵩 (1993) 『新しい家族社会学』 (培風館) 第 IV 章 (7. ライフサイクル) 66—78
5. クレイン (1984) 『発達の理論』 (小林芳郎・中島実訳：田研出版) 第 5 章 87—124 及び第 8 章 177—206

その他の文献 1 (日本)

- 荒川義子 (1986) 「危機介入」『臨床ケースワーク』 (武田建・荒川義子編：川島書店) 第 VI 章 133—145
- 石原邦雄 (1989) 「家族研究とストレスの見方」『家族生活とストレス』 (石原邦雄編：垣内出版) 第 1 章 11—56

その他の文献 2 (海外)

- Hartman, A. (1979). *Finding Families: An Ecological Approach to Family Assessment in Adoption*. Cal.: Sage Publications, INC.
- Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015). *Applying Theory to Generalist Social Work Practice*. New Jersey: Wiley, 24.
- Kanfer, F.H., Schefft, B.K. (1988): *Guiding the Process of Therapeutic Change*. Campaign, III: Research Press

(3) パートⅢ：ソーシャルワーク実践モデルの学び

パートⅢでは、ソーシャルワーク実践モデルの学び・整理・発表である。近年、北米を中心に多くのソーシャルワーク実践モデルが開発されてきている。こうした各種のモデルやアプローチを学び、実践現場での応用と活用は重要である。支援方法のレパートリーを豊富にしておくことは、効果的な支援を構築するためには必須である。いろいろな支援モデルやアプローチを組み合わせていく可能性をも開く機会ともなる (Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. 2015 ; ジョンソン&ヤンカ, 2004)。

本授業では、各班がグループで事前学習をとおして、各班が選択した実践モデルを発表する。発表の形式は自由である。参考例としての課題整理法はあらかじめ提示しておく。事例研究と兼ね合わせる発表も興味ある方法であった。また問題の多様性に合わせて一つの実践モデルに拘らずに、支援プロセスと進展状況を踏まえ、色々なアプローチ・モデルを適宜検討して発表に盛り込んでいる (後述の補助教材資料③参照)。

表 21：相談援助の方法と理論Ⅰの日程

パートⅢ ソーシャルワーク実践モデルの理解 (各班の発表：実践モデル&事例研究)	
⑧ 06月10日	ソーシャルワークの実践モデル (1) (第6章：各班のモデル&事例研究の発表) ライフモデル ストレングスモデル その他
⑨ 06月17日	ソーシャルワークの実践モデル (2) (第6章：各班のモデル&事例研究の発表) 心理社会的アプローチ 機能的アプローチ 問題解決アプローチ等
⑩ 06月24日	ソーシャルワークの実践モデル (3) (第6章：各班のモデル&事例研究の発表) 危機介入アプローチ 行動療法的アプローチ 家族療法的アプローチ等
⑪ 07月01日	ソーシャルワークの実践技法 (1) (第7章)：グループワーク理論の紹介1 SSTの実際 (訓練モデル：前田ケイ)
⑫ 07月08日	定期試験 (take-home-exam) の発表 (問題の配布&説明日) & 学内アンケート：グループワーク理論の紹介2 FGC (ジョアンの事例：高橋重宏・林浩康)
⑬ 07月15日	ソーシャルワークの実践技法 (2) (第8章) FGC (ミヒの事例：高橋重宏・林浩康)：グループワーク理論と コミュニティワーク理論への橋渡し
⑭ 07月22日	21世紀におけるソーシャルワークを考える&前期のふりかえり マクロ的視点の紹介：アドボカシーと専門職教育の課題
⑮ 07月29日	定期試験 (take-home-exam) の提出日

授業では、グループワーク理論とコミュニティワーク理論を展開する時間が少なく、その時間の確保が課題となっている。現実的には、SSTとFGCに関するビデオ教材を提示するのみである。以下の資料がその補助教材資料の一例である。今後はこうした教材を効果的に授業に組み込むことが課題となっている。なお、シナリオ面談法教育は興味深い訓練法の一つであろう。

補助教材資料①：SST の基本構造および認知行動理論

SST (生活技能訓練法) は、日常の生活状況におけるコミュニケーション技能, 感情表現技能, 社会状況下における効力感を促進するための技法として構築された援助技法である。具体的な学習枠組みは、(1) モデリング技法, (2) 役割演技, (3) フィードバック法であり、具体的な生活技能を培い、かつ実践活動を重視する方法である。SST は、クライアントが向上させたいと考える技能を見極め、そうした技能をグループメンバーと繰り返し共有する機会を提供する (Gingerich, S., 2002, pp.392-394. ; 前田 1995&1998 ; 鈴木・伊藤 1997)。

表 22： SST 訓練のステップ (Steps for Teaching Social Skills) (試訳)

第 I 段 階	<p>1. Establish <u>a rationale for learning the skill</u>. 生活技能を学ぶための理由付けを確立する。</p> <p>2. Present the steps of the skill by writing them on a blackboard or flipchart, or by distributing handouts of the steps written in a large, bold, and easy-to-read typeface. 黒板やフリップチャートに各生活技能を書き、大判で、厚手の紙に読みやすい文字でそのステップを提示する。</p> <p>3. Model the skill by demonstrating how you would use the steps of the skill in an <u>everyday situation</u>. 毎日の生活状況で、どのようにその技能を活用しているかのステップを提示する。</p> <p>4. Ask a group member to practice the skill in a role play. 役割演技の中で、その技能をグループメンバーに演じてもらうように依頼する。</p>
第 II 段 階	<p>5. <u>Ask for positive feedback</u> from the group members. グループメンバーから肯定的なフィードバックを依頼する。</p> <p>6. Ask for “corrective” feedback from the group members, encouraging suggestions <u>for improvement rather than criticism</u>. 参加メンバーに、批判ではなく、改善すべき点のフィードバックを依頼する。</p> <p>7. Ask the group member to use the corrective feedback by doing <u>another role play of the same situation</u>, this time making a change based on one of the suggestions given in step six. 参加メンバーに、改善点に関するフィードバックを活用し、同じ状況下での役割演技を依頼する。</p> <p>8. Ask for additional <u>positive</u> and corrective <u>feedback</u>, starting with the positive. その他、肯定的、改善点に関するフィードバックを求める。</p>
第 III 段 階	<p>9. Give <u>everyone a chance</u> to role-play and to receive feedback. 参加者全員が役割演技やフィードバックをもらえるようにその機会を提供する。</p> <p>10. Assign group members <u>“homework”</u> to practice the skill, using written assignment sheets. 宿題シートを活用し、ホームワークを参加メンバーに提供し、日常生活場面での活用を促す。</p>

出典：Susan Gingerich (2002) “Guidelines for Social Skills Training for Persons with Mental Illness” pp.392-394. In Roberts, A.R. & Greene (Ed.) *Social Workers’ Desk Reference*, NY.; Oxford Univ. Press, Inc. 《あなたのキーワードを探してみましよう》

なお、表 23 と表 24 は、Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) による認知行動理論の基本枠組みである。授業では、時間的余裕がある際には、適宜その理論にも言及する。

表 23：行動主義および認知理論に関する概念（試訳）

Classical Conditioning 伝統的條件付け	Behavior explained by <i>antecedents</i> , or what happens before a behavior 先行因子によって説明される行動，あるいは行動以前に生起する事象
Operant Conditioning オペラント条件付け	Behavior explained by the <i>resulting consequences</i> of that action ある行動を誘発する帰結によって説明される行動
Reinforcers 強化因子	Consequences following a behavior that <i>increase the likelihood the behavior</i> will occur again ある行動が再度引き起こされるような状況を増強する行動
Punishers 罰	Consequences following a behavior that <i>decrease the likelihood the behavior will continue</i> ある行動が再度引き起こされないようにする行動
Imitation 模倣	The process of learning that occurs when observing a <i>model</i> モデルを観察する際に生起する学習の過程
Cognition 認知	<i>Automatic thoughts and core beliefs</i> that influence emotion and behavior 情緒や行動に影響する自動的思考と中核的信念

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) p.148

表 24：認知行動的介入方法（試訳）

Behavioral Activation 行動刺激活動	Implementing <i>behavioral homework assignments</i> that allow clients to experience and practice new behaviors クライアントが新しい行動を体験し，実践できるための行動的なホームワーク
Reinforcement Scheduling 再強化スケジュール	Setting up reinforcers and punishers that <i>encourage positive behavior change</i> 肯定的な行動変容を促すための強化因子と罰因子
Desensitization 脱感作	Creating <i>opportunities</i> for clients to experience <i>behaviors in a new way</i> , thereby helping them to <i>feel and think differently about the experience</i> クライアントが新たな方法で行動を経験できるように機会を作り，その経験をクライアントが感じ，異なるように考えられるように援助すること
Cognitive Restructuring 認知的再構成	Identifying, confronting, and <i>replacing illogical and unhelpful thinking patterns</i> with new ways of thinking 不合理で非援助的な思考パターンを新たな思考方法を発見し，対峙し，かつ置換すること
Psychoeducation 心理教育	Teaching clients one on one or in group settings about skills that can help foster <i>positive behavior change</i> , including anger management, parenting, and social skill training クライアントを一对一，あるいは集団の中で，怒りのマネジメント，子育て，社会的技能訓練を含む教育をとおして肯定的な行動変容を促進すること

出典：Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) p.155

《あなたのキーワードと出会いましょう》

補助教材資料②：FGC の基本構造およびストレングスソーシャルワークにおける重要概念

FGC の活動は、1980 年代にニュージーランドの児童福祉局 (Child Welfare Personnel) によって開発された家族支援のアプローチとして、今日欧米各国においても導入されている。家族や親せき、さらには同族による家族支援の方法である。児童虐待に対応する援助手法であり、近年では地域社会の非行問題にも適応、展開されている。対象児童を家族や親せき、さらには地域社会に暮らす警察、教師、牧師等を含むネットワーク支援のアプローチ法である。詳細モデルは以下の資料のとおりである (表 25 表 26 表 27 参照)。

また、この FGC モデルの基盤は、ストレングススペースペクティブの考え方と呼応するであろう。なお、FGC モデルの理論的背景には、表 28 と表 29 の概念や基本原則が網羅されている。サービス提供者とサービス利用者交互の協働作業の重要性が強調されている。FGC の参考ビデオは、以下のとおりである。

- (1) 林浩康 (2016) 『子ども虐待における家族支援：ファミリーグループ・カンファレンスの実践：第 1 巻準備編；第 2 巻実施編』 新宿スタジオ
- (2) 高橋重宏 (2015) 『子ども家庭福祉分野における家庭支援のあり方に関する総合的研究 DVD』 平成 21 年厚生労働科学総合研究事業研究班
- (3) 林浩康 (2011) 『ファミリーグループ・カンファレンス入門：子ども虐待における「家族」が主役の支援』 明石書店

表 25：FGC の基本理念 1：家族ストレングスと社会資源

<ol style="list-style-type: none"> (1) 家族は自分たちの課題を自分たちで解決することを望み、家族自身そうした力を有している (2) ソーシャルワーカーがストレングスを明確にする技術を十分有しておれば、家族は課題に対処できる (3) 家族はよい結果を得るのに必要な知識を有している (4) ソーシャルワーカーは自分たちが扱われたいように家族を扱えば、家族はよい結果を得る可能性を高める (5) 我々は家族の決定を支え、実行可能な解決策が展開されるまで、家族の試みを支え続けることが必要である (6) 家族が求める資源を提供する必要がある
--

出典：(Walker, et al., 2000:24；林, 2004-B:134)

表 26：FGC の基本理念 2：傾聴と豊かな選択肢

<ol style="list-style-type: none"> (1) 家族はストレングスと変革の可能性をもつ (2) ストレングスは最終的に懸念事項の解決に役立つ (3) ストレングスは傾聴し、注目し、関心を寄せることで発見される (4) ストレングスは認識されたときや、勇気付けられたときに強化される (5) 人々は傾聴されることで希望をもつ。傾聴されれば人の声にも耳を傾けようとする (6) 選択肢を与えることはアドバイスを与えることより大切である (7) 人々をエンパワーすることは統制することより大切である (8) 寄り添ってくれる人はアドバイスを与えてくれる人より大切である
--

出典：(Walker, et al., 2000:131；林, 2004-B：135)

表 27：FGC の具体的手順

過程	状 況
●情報共有段階	(1) 自己紹介をする (2) コーディネーターによる FGC の目的や過程，法的権利とうの説明をする (3) ソーシャルワーカーによるケース状況の説明をする：子どもや家庭に関する情報 (4) その他の援助者（心理カウンセラー，弁護士，教員，医師，保健師，その他）によるこれまでの関わり状況の説明および各種専門分野に関する情報の提供する：例えば，性的虐待に関する原因論，加害者行動のパターン，被害者の反応，子どもや家族の虐待による衝撃に関する情報提供，薬物やアルコール乱用に関する情報，治療方法，薬物療法，予後の問題，ペアレンティングへの影響，その他問題・課題に対する専門的情報の提供
●私的討議段階	(1) 家族のみで情報を共有，共通理解を促進する (2) 家族の意思決定：例えば，今後の子どもの生活場所，目標，子どもと親が必要とする支援内容，親の子どもへのアクセス方法，養育計画実施に関するモニタリングやそのレビュー方法を整理，検討する (3) 家族のみでの養育計画の決定：家族の要請がある時のみ，専門家はそのセッションには参加しない。あくまで最終決定は家族が下す
●合意段階	(1) コーディネーターが，家族によって決定された養育計画を参加メンバーに提示する (2) 専門家からの養育計画案に対するコメントやアドバイスも参考にする (3) 最終的な養育計画案に対する合意をする (4) 合意された計画案は，法的に合致していることを確認し，担当局は対象家族が必要としているサービスやその財源を保証する (5) 合意が得られない場合には，再度 FGC が召集されるかあるいは家庭裁判所に送致される (6) ケースレビューやモニタリングの方法を検討する (7) 最終的に合意された計画，決定事項を整理し，参加者全員にそのコピーを配布する

出典：林（2004-B, 117）を参考に，佐々木および林が一部改変・作成する。

表 28 ストレングスソーシャルワークにおける重要な概念 (試訳)

Strengths ストレングス	<u>Internal and external resources and capacities</u> that assist people in the change process 変化の過程における人びとを支える内的・外的資源および潜在力
Resilience レジリアンス	The ability to <u>overcome adversity, maintaining or even sometimes enhancing function</u> 逆境を克服するためにその機能を維持しあるいは時にその機能をさらに高める能力
Hope 希望	A belief in the possibility of <u>positive outcomes</u> 肯定的な結果の可能性を信じることあるいは信念
Culture 文化	<u>Beliefs, traditions, and daily activities</u> of a group of people 人間集団が作り出す信念 (信仰), 伝統, 日常の諸活動
Cultural Identity 文化的同一性	<u>Membership or a sense of belonging</u> to a group of people that informs beliefs, practices, and traditions 信念 (信仰), 慣習 (ならわし), 伝統を伝えるためのメンバーシップ (会員) あるいは所属感
Collaboration 協働	A relationship that equalizes <u>power</u> , supporting shared <u>decision making</u> 決定を相互に支持しあい, 権限を平等に分ち合う人間関係

出典 : Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) p.61.

《あなたのキーワードに出会いましょう》

表 29 ストレングスソーシャルワークの原則 (試訳)

原則 1	All people, families, groups, and communities have <u>strengths</u> . 全ての人びと, 全ての家族, 全ての集団, 全てのコミュニティは, ストレングスを保持している.
原則 2	All people, families, groups, and communities have the capacity for <u>growth and improvement</u> . 全ての人びと, 全ての家族, 全ての集団, 全てのコミュニティは, 成長と進化する能力を保持している.
原則 3	All people, families, groups, and communities are <u>experts in their lives</u> . 全ての人びと, 全ての家族, 全ての集団, 全てのコミュニティは, その生活に関する専門家であり, 熟知している.
原則 4	Support and services should be provided in <u>naturally occurring settings</u> whenever possible. 支援とサービスは, いつでもその事態が生起している状況においては, 可能な限り提供されるべきである.
原則 5	<u>Services</u> should remain <u>flexible and responsive</u> to the unique needs of each client situation. サービスは, 各クライアントの状況において必要とされるユニークなニーズに対応できるようにその融通性と対応力を保持していること.
原則 6	<u>Human relationships</u> are highly valued. 人間的な関係性は高く評価される.

出典 : Langer, C. L. & Lietz, C.A. (2015) p. 64.

《あなたのキーワードに出会いましょう》

補助教材資料③：支援フレームワーク・モデル・アプローチを選択する際の原則および留意点

Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (2015) は、以下のポイントを提示している：授業では、ライフモデルを中心に、問題解決アプローチ、心理社会的アプローチ等、多様な援助方法の紹介に努力している。また、ジェネラリストソーシャルワークを展開する際には、こうした各種のモデルやアプローチ法を混合・組み合わせ・折中しつつ、援助の展開法の指導に腐心している。事例研究においては、日々、混乱と試行錯誤の状態でもある。以下の事項は、その際に、配慮すべきポイントとして重要な示唆となっている（試訳: pp. 68-70）。

ポイントⅠ：サービス利用者の生活状況・背景を把握する

- (1) どのようなタイプのクライアントか？
- (2) どのような種類の問題にクライアントは直面しているか？
- (3) どのような実践領域・分野か？
- (4) どのような社会状況、背景が存在しているのか？

ポイントⅡ：サービス利用者が置かれている問題状況・支援過程・サービス組織を理解する

- (1) ソーシャルワーカーが注目する問題や課題の性質（課題解決への意欲の有無、裁判所からの命令によるものであるのか）
- (2) クライアントあるいはサービスユーザーの特徴（10代の青少年か、高齢者か、人種的・文化的背景）
- (3) 援助過程の段階
- (4) 実践現場あるいは実践を展開する組織機関のコンテキスト（状況）

ポイントⅢ：クリティカルな思考能力と創造性や融通性を培うこと

- (1) ソーシャルワーカーのビジョンやオプションを拡大、あるいは拘束する
- (2) フレームワークの依拠する概念、信念、前提・想定は、継続的に検証され、かつ新たな研究結果で構成されるべきである。
- (3) 学生や初任者ソーシャルワーカーは、1つの特定の実践フレームワークに固執する傾向があり、こうしたことは結果的には、専門職の成長の妨げとなり、有効なクライアントサービスの展開に支障をきたすことになる。

ポイントⅣ：具体的な課題・限界性に注目・留意すること

- (1) 特定のクライアント、クライアント集団に関わる際には、ソーシャルワーカーはいくつかの実践フレームワークを一緒に活用し、あるいは連続的に活用することもある。
- (2) 援助過程の段階をとおして、各種のフレームワークの特徴を理解し、効果的に活用することは重要である。すなわち、1つのフレームから別のフレームワークにシフトする（7章）ことも考えられる：
 - ① エコシステムパースペクティブは、初期段階で最も有用である（問題の定義とアセスメント段階）とされているが、計画段階・介入実施段階、あるいは援助に関する評価段階では、あまり有効ではないとの評価がある。
 - ② 行動療法は行動変容に関する詳細なガイダンスを提供するが、特定の行動を変容することに介入の焦点が当てられるため、問題の介入効果は限定的になる。

出典：Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (2015) *Techniques and Guidelines for Social Work Practice*, 10th edition, New Jersey: Pearson Education, Inc. Chapter 6 & 7

参考文献

1. 伊藤富士江 (2004) 「少年司法における家族グループ会議」『社会福祉学』第 45 巻第 1 号 日本社会福祉学会 67—76
2. 桐野由美子・家庭訪問支援プロジェクトチーム (2003) 『子ども家庭支援員マニュアル』明石書店
3. 久保紘章・副田あけみ編著 (2009) 『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店
4. マリー・コノリー & マーガレット・マッケンジー (2005) 『ファミリーグループ・カンファレンス』(高橋重宏監訳) 有斐閣
5. 芝野松次郎 (2005) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』有斐閣
6. 京都国際社会福祉センター (1982) 『社会福祉専門教育の課題』京都国際社会福祉協力会
7. 佐々木政人 (1999 a) 「21 世紀におけるヒューマンサービス機関が担う課題」『国際社会福祉情報』23 号 京都国際社会福祉センター 35—42
8. 佐々木政人 (1999 b) 「社会福祉援助者の役割と戦略」『社会福祉援助方法』有斐閣 205—221
9. 佐々木政人・林浩康 (2005) 「解題：ファミリーグループ・カンファレンスの挑戦」『ファミリーグループ・カンファレンス』有斐閣 205—237
10. 前田ケイ (1995) 「よい家族関係のための SST」『わかりやすい生活技能訓練』金剛出版, pp. 113—144
11. 前田ケイ (1998) 「SST のグループ実践におけるアドボカシーとエンパワーメント」『社会福祉研究』第 72 号 19—25
12. 林浩康 (2004-A) 「援助過程における家族参画の視点」『北星論集』北星学園大学
13. 林浩康 (2004-B) 『児童養護施設の動向と自立支援・家族支援』中央法規
14. 水野良也・佐々木政人 (2005) 「開発的福祉実践を支える教育訓練法の試み」『人間科学』第 16 号 琉球大学法文学部人間科学紀要 73—109

その他の文献 1 (日本)

- 佐々木政人・澁谷昌史編著 (2013) 『子ども家庭福祉』光生館
- 小松源助 (2002). 『ソーシャルワーク実践理論の基礎研究：21 世紀への継承を願って』川島書店
- 東大生活技能訓練研究会 (1995) 『わかりやすい生活技能訓練』金剛出版

その他の参考文献 2 (海外)

- Connolly, M. & McKenzie, M. (1999). *Effective Participatory Practice: Family Group Conferencing in Child Protection*. Aldine De Gruyter.
- Gingerich, S. (2002) “Guidelines for Social Skills Training for Persons with Mental Illness” pp.392--394. In Roberts, A.R. & Greene (Ed.) *Social Workers' Desk Reference*, N.Y.: Oxford Univ. Press, Inc.
- Kotler, Philip and Roberto, Eduard L. (1989) *Social Marketing*. The Free Press.
- Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (2015) *Techniques and Guidelines for Social Work Practice*, 10th edition, New Jersey: Pearson Education, Inc.

4. まとめと提言：ジェネラリストソーシャルワーク実践への道程

本論では、下記の 4 点を基盤に、『相談援助の理論と方法 I』の授業内容を提示してきた。

- (1) ソーシャルワーク実践における基本枠組み：エコ・システムの視座
- (2) ソーシャルワーク実践モデル：ライフモデル論
- (3) ソーシャルワーク実践の原則：『ケースワークの 7 原則（バイステック）』
- (4) ソーシャルワーク実践の技法：マイクロ面接技法

今日、日本におけるソーシャルワーク専門教育は、ジェネラリストモデルを志向しようとしているが、それが妥当であるかどうかの検証は、今後の重要な課題である。日本文化・福祉制度に立脚した基本枠組みの構築（理論）、具体的な支援モデルの構築、支援モデルを構成する多様な援助技法と技術の開発、各技法の研修・教育プログラムの構築、スーパービジョン、有効性の評価基準等、多様な課題が提示されている（木村・小原，2019；東京社会福祉士会，2019）。

今年度（2020 年度）は、コロナ禍において、未曾有の社会的変動に翻弄された年度であった。個人、家族、地域コミュニティをターゲットとした福祉貢献活動のあり方も新たな課題に直面した時期である。福祉人材の育成の担い手である大学教育も多様な方向性を模索せざるを得ない状況でもある。ミクロの視点からマクロの視点、マクロの視点からミクロの視点等、総合的で、俯瞰的視座に根ざしたソーシャルワーク教育はいかにあるべきか、ジェネラリストソーシャルワーク教育の方向性とあり方が問われている。ソーシャルワーク専門教育の目標は、広範な社会的ニーズ応えるための福祉サービスの構築力・開発力・提示力・実践力を備えたソーシャルワーカー養成・育成にある（Sheafor & Horejsi, 2008）：

- (1) 社会的機能を促進する力量（ソーシャルケアの充実、ソーシャルトリートメント、ソーシャルエンハンスメントのサービスの充実）
- (2) ソーシャルコンディッションを充実・構築する力量

上記 2 点の力量を総合的に醸成するためのソーシャルワーク専門教育とは何かを今後も問い続けたい。

最後に、再度以下の原著抜粋文を朗読・写本メソッドで味わいましょう。

Social Work's Purpose

An understanding of the social work profession begins with a deep appreciation of humans as social beings. *People are, indeed, social creatures.* They need other people. Each individual's growth and development requires the guidance, nurturing, and protection provided by others. And that person's concept of self—and even his or her very survival, both physically and psychologically—is tied to the decisions and actions of other people. It is this *interconnectedness and interdependence of people* and the *power of social relationships* that underpins social workers' commitment to improve the quality and effectiveness of those interactions and relationships—in other words, to enhance *clients' social functioning* and, at the same time, to improve *the social conditions* that affect social functioning.

出典：Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (2015) *Techniques and Guidelines for Social Work Practice* (10th edition). New Jersey: Pearson Education, Inc., p.4

参考文献1 (日本)

- 愛育研究所 (2001～2019) 『日本子ども資料年鑑』 KTC 中央出版
- 秋山邦久 (2009) 『臨床家族心理学』 福村出版
- アレン・E・アイビー (2010) 『マイクロカウンセリング (福原真知子他訳)』 川島書店
- 石原邦雄 (1989) 『家族生活とストレス』 垣内出版
- 伊藤富士江 (2004) 「少年司法における家族グループ会議」 『社会福祉学』 第45巻第1号
日本社会福祉学会 67—76
- 岩田正美監修 白澤政和・岩間伸之編著 (2011) 『ソーシャルワークとはなにか』
(リーディングス日本の社会福祉4) 日本図書センター
- 岩田泰夫 (2007) 『シナリオで学ぶ SST』 中央法規
- 岩間伸之・白澤政和・福山和女 (2010&2013) 『ソーシャルワークの理論と方法 I』
ミネルヴァ書房
- 井関利明 (1999) 「監訳者解説—ソーシャル・マーケティングの新しい展開」 『ソーシャル・マー
ケティング』 Kotler, Philip and Roberto, Eduard L. 著 (井関利明監訳) ダイアモ
ンド社: 423
- 遠藤和佳子・芝野松次郎 (1998) 「養護施設における早期家庭復帰援助プログラムの研究開発
(R&D): パーマネンシーの保障にむけて」 『ソーシャルワーク研究』 Vol.23, No4,
19—29
- 大塚達雄・井垣章二・沢田健次郎・山辺朗子 (1994) 『ソーシャル・ケースワーク論』
ミネルヴァ書房
- 大島侑・佐々木政人編著 (2000) 『社会福祉援助技術論』 ミネルヴァ書房
- 大日向雅美 (2008) 『地域の子育て環境づくり』 ぎょうせい
- 太田義弘・佐藤豊道 (1984) 『ソーシャル・ワーク』 海声社
- 岡堂哲雄 (1992) 『家族心理学入門』 培風館
- 岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』 全国社会福祉協議会
- 岡本民夫 (1985) 「ケースワーク理論の動向 (I)」 『評論・社会科学』 26号
同志社大学人文学会 71—79
- 岡本民夫 (2011) 「ケースワーク理論の動向 (II)」 『ソーシャルワークとはなにか (白澤政和・
岩間伸之編著)』 日本図書センター 226—243
- 尾崎新 (2015) 『「ゆらぐ」 ことのできる力』 誠信書房
- 片山又一郎 (2003) 『コトラー入門』 日本実業出版社
- 亀口憲治 (2000) 『家族臨床心理学』 東京大学出版会
- 木村容子・小原真知子 (2019) 『ソーシャルワーク論』 ミネルヴァ書房
- 北島英治 (2002) 『ソーシャルワーク実践の基礎理論』 有斐閣
- 北島英治 (2008) 『ソーシャルワーク論』 ミネルヴァ書房
- 北島英治 (2016) 『ソーシャルワーク・プラクティス』 ミネルヴァ書房

- 桐野由美子・家庭訪問支援プロジェクトチーム（2003）『子ども家庭支援員マニュアル』
明石書店
- 京都国際社会福祉センター（1982）『社会福祉専門教育の課題』京都国際社会福祉協力会
カレル K. カースト・アッシュマン(2007)『マクロからミクロのジェネラリストソーシャル
ワーク実践の展開（宍戸明美他監訳）』筒井書房
- カレル・ジャメーン他（1992）『エコロジカルソーシャルワーク（小島蓉子編訳・著）』学苑社
カレル・ジャメーン&アレックス・ギッターマン（2008）『ソーシャルワーク実践と
生活モデル上・下（田中禮子・小寺全世・橋本由紀子監訳）』ふくろう出版
- ルイズ C.ジョンソン & ステファン J. ヤンカ（2004）『ジェネラリスト・ソーシャルワーク
（山辺朗子・岩間伸之訳）』ミネルヴァ書房
- 柏木恵子（2003）『家族心理学』東京大学出版会
- 木村容子・小原眞知子（2019）『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房
- 黒川昭登（1986）『臨床ケースワークの基礎理論』誠信書房
- 黒木保博（2002）『ソーシャルワーク』中央法規
- 久保紘章・副田あけみ編著（2009）『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店
- 倉石哲也（2004）『家族ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房
- クレイン（1984）『発達の理論（小林芳郎・中島実訳）』田研出版
- 片山又一郎（2003）『コトラー入門』日本実業出版社
- スーザン・ケンプ & ジェームズ・ウイッターカー他（2000）『人—環境のソーシャルワーク
（横山穰・北島英治他訳）』川島書店
- 神波幸子・佐々木政人（2014）『社会福祉援助技術演習の教材研究（1）
福祉援助職の臨床実践力の向上を目指して』愛知淑徳大学福祉貢献学部
- フィリップ・コトラー & ロバート・エデュアル（1989）『ソーシャル・マーケティング』
（井関利明監訳）ダイヤモンド社
- マリー・コノリー & マーガレット・マッケンジー（2005）『ファミリーグループ・カンファ
レンス』（高橋重宏監訳）有斐閣
- 空閑浩人（2016）『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ書房
- 小松源助（1993）『ソーシャルワーク理論の歴史と展開』川島書店
- 小松源助（2002）『ソーシャルワーク実践理論の基礎研究：21世紀への継承を願って』
川島書店
- 佐藤豊道（1994）「ソーシャルワーク理論における「人間：環境：時間」概念の検討
『ソーシャルワーク研究』第20巻 第1号 16—24
- 佐藤豊道（2001）『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店
- 佐々木政人（1996）「現代日本の家族問題と家族ソーシャルワーク」『子ども家庭白書』
川島書店 152—167
- 佐々木政人（1999-A）「21世紀におけるヒューマンサービス機関が担う課題」

- 『国際社会福祉情報』23号 京都国際社会福祉センター 35—42
- 佐々木政人 (1999-B) 「社会福祉援助者の役割と戦略」『社会福祉援助方法』有斐閣 205—221
- 佐々木政人 (1999-C) 「家族エンパワメント」『エンパワメント実践の理論と技法』中央法規
112—136
- 佐々木政人・林浩康 (2005) 「解題：ファミリーグループ・カンファレンスの挑戦」
『ファミリーグループ・カンファレンス』有斐閣 205—237
- 佐々木政人・水野良也 (2005) 「福祉専門教育を支える新パラダイム：ソーシャル・マーケティング法に依拠する福祉専門職の育成」『医療福祉学紀要』愛知淑徳大学
- 佐々木政人 (2006) 「現代社会と児童家庭を取り巻く環境の変化」『児童福祉』
全国社会福祉協議会 44—54
- 佐々木政人・澁谷昌史編著 (2013) 『子ども家庭福祉』(光生館)
- 佐々木政人 (2019) 「相談援助演習科目におけるシナリオ面接訓練法の開発」『愛知淑徳大学集』
第9号 愛知淑徳大学福祉貢献学部 25—38
- 佐々木政人 (2020) 「家族援助論・家族ソーシャルワーク論への関わりと歩み」『愛知淑徳大学
論集』第10号 愛知淑徳大学福祉貢献学部 28—50
- 鈴木丈・伊藤順一郎 (1997) 『SSTと心理教育』中央法規出版
- 全国社会福祉協議会編 (1999) 『児童家庭福祉論』全国社会福祉協議会編
- 全米ソーシャルワーカー協会 (1993) 『ソーシャル・ケースワーク：ジェネリックとスペシフィック (ミルフォード会議報告) (竹内一夫他訳)』相川書房
- 汐見稔幸 (2008) 『子育て支援の潮流と課題』ぎょうせい
- 芝野松次郎 (2005) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』有斐閣
- 澁谷昌史 (2002) 『ソーシャルワーク実践の基礎理論』有斐閣
- 嶋田啓一郎 (1980) 『社会福祉体系論』ミネルヴァ書房
- 嶋田啓一郎 (1980) 『社会福祉の思想と理論』ミネルヴァ書房
- 白澤政和・福留昌城・福山和女他編著 (2015) 『相談援助の理論と方法 I』中央法規
- 白澤政和・岩間伸之編著 (2011) 『ソーシャルワークとはなにか (第4巻：岩田正美監修)』
日本図書センター
- 高橋重宏・庄司順一 (2002) 『子ども虐待』中央法規
- 高橋重宏・山縣文治・才村純編 (2002) 『子ども家庭福祉とソーシャルワーク』有斐閣
- 日本医療ソーシャルワーク研究会 (2019) 『医療福祉総合ガイドブック』医学書院
- 高山俊雄 (2015) 『現場で磨くケースワークの技法』現代書館
- 武田建・荒川義子 (1986) 『臨床ケースワーク』川島書店
- 武田建・津田耕一 (2017) 『ソーシャルワークとは何か』誠信書房
- フランシス・J・ターナー (1999) 『ソーシャル・ワーク 上下 (米本秀仁監訳)』中央法規
- 鑪幹八郎 (1990) 『アイデンティティの心理学』講談社
- 東京社会福祉士会 (2019) 『ソーシャルワークの理論と実践の基盤』へるす出版

- 津崎哲郎 (2000) 「児童虐待事例の家族支援のあり方」『ソーシャルワーク研究』26 (3)
相川書房 187—192
- ドナ C. アギュララ／ジャニス M. メズイック (1997) 『危機介入の理論と実際
(小松源助・荒川義子訳)』川島書店
- 東大生活技能訓練研究会 (1995) 『わかりやすい生活技能訓練』金剛出版
- 野口啓示 (2009) 『むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング』明石書店
- 野口啓示 (2015) 『むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング 思春期編』明石書店
- 平山尚 (2011) 「米国の方法論統合化への過程：システム論と実践理論の関係と応用」『ソーシャルワークとはなにか (白澤政和・岩間伸之編著)』日本図書センター 217—225
- 林浩康 (2004-A) 「援助過程における家族参画の視点」『北星論集』
北星学園大学社会福祉学部 99—116
- 林浩康 (2004-B) 『児童養護施設の動向と自立支援・家族支援』中央法規
- 林浩康・鈴木浩之 (2011) 『ファミリーグループ・カンファランス入門』明石書店
- クララ・E・ヒル (2015) 『ヘルピング・スキル (第2版) 藤生英行監訳』金子書房
- ディーン・H・ヘブワース&ジョアン・ラーセン (2017) 『ダイレクト・ソーシャルワークハン
ドブック (武田信子・北島英治他監修・訳)』明石書店
- マルコム・ペイン (2019) 『ソーシャルワークの専門性とは何か (竹内和利訳)』ゆみる出版
- 福山和女 (2005) 『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房
- M. フレーゼ (1978) 『行動療法の理論と演習』京都国際社会福祉センター
- フェリックス・P・バイスティック (1996) 『ケースワークの原則 (尾崎新他訳)』誠信書房
- ヘレン・H・バートレット (2009) 『社会福祉実践の共通基盤 (小松源助訳)』ミネルヴァ書房
- フォン・ベルタランフィ (1990) 『一般システム理論』みすず書房
- 内閣府 (2017) 『平成 29 年版 少子化社会対策白書』日本印刷 (株)
- 内閣府 (2017) 『子供・若者白書』日本印刷 (株)
- 中谷奈津子 (2008) 『地域子育て支援と母親のエンパワーメント』大学教育出版
- 早樫一男 (2016) 『対人援助のためのジェノグラム入門』中央法規
- 中村優一他監修 (2007) 『エンサイクロペディア』(中央法規)
- 古川孝順 (2002) 『援助するということ』有斐閣
- 前田ケイ (1995) 「よい家族関係のための SST」『わかりやすい生活技能訓練』
金剛出版, 113—144
- 前田ケイ (1998) 「SST のグループ実践におけるアドボカシーとエンパワーメント」
『社会福祉研究』 第 72 号 19—25
- 前田ケイ (1999) 『SST ウォーミングアップ活動集』聖和書店
- 前田ケイ (2013) 『基本から学ぶ SST』聖和書店
- 向谷地生良 (2012) 「ソーシャルワークにおける当事者との協働」『対論社会福祉学 4 ソーシ
ャルワークの思想』日本社会福祉学会 中央法規 245—273

- 水野良也・佐々木政人（2005）「開発的福祉実践を支える教育訓練法の試み」『人間科学』
第16号 琉球大学法文学部人間科学紀要 73—109
- 望月嵩（1996）『家族社会学入門』培風館
- 森岡清美・望月嵩（1993）『新しい家族社会学』培風館
- メアリー・リッチモンド（1991）『ソーシャル・ケースワークとは何か（小松源助訳）』
中央法規
- 米川和雄（2016）『ソーシャルワーカーのための社会調査の基礎』北大路書房
- 山辺朗子（2011）『ジェネラリスト・ソーシャルワークの基盤と展開』ミネルヴァ書房
- 山辺朗子（2015）『ジェネラリスト・ソーシャルワークにもとづく社会福祉のスーパービジョン』
ミネルヴァ書房
- 山本和郎（1986）『コミュニティ心理学』東京大学出版会
- 渡辺顕一郎（2009）『子ども家庭福祉の基本と実践』金子書房

参考文献2（海外）

- Andersen, Alan. (1995). *Marketing Social Change: Changing Behavior to Promote Health, Social Development, and the Environment*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Burford, G. & Hudson, J. (2000). *Family Group Conferencing*. Aldine De Gruyter.
- Connolly, M. & McKenzie, M. (1999). *Effective Participatory Practice: Family Group Conferencing in Child Protection*. New York: Aldine De Gruyter.
- Doolan, M. & Phillips, P. (2000). “Conferencing in New Zealand: Child Protection.”
Gale Burford & Joe Hudson (Eds.), *Family Group Conferencing*. New York: Aldine De Gruyter.
- Enrich, Nedra Kline. (1999). *Hands-On Social Marketing: A Step-by-Step Guide*. Cal.: Sage.
- Garvin, C. D. & Tropman, J. E. (1992). *Social Work in Contemporary Society*.
New Jersey: Prentice Hall.
- Germain, C. B. & Gitterman, A. (1980). *The Life Model of Social Work Practice*.
New York: Columbia Univ.
- Germain, C.B. & Gitterman, A. (1995). *The Life Model of Social Work Practice*
(Second Edition). New York: Columbia Univ.
- Germain, C.B. & Gitterman, A. (2008). *The Life Model of Social Work Practice*
(Third Edition). New York: Columbia Univ.
- Gingerich, S. (2002). “Guidelines for Social Skills Training for Persons with Mental Illness”
pp.392-394. In Roberts, A. R. & Greene (Ed.) *Social Workers’ Desk Reference*, New
York: Oxford Univ. Press, Inc.
- Kinney, J., Happal, D. & Booth, C. (1991). *Keeping Families Together: The Homebuilders
Model*. New York: Aldine De Gruyter.

- Hartman, A. (1979). *Finding Families: An Ecological Approach to Family Assessment in Adoption*. Cal.: Sage Publications, INC.
- Hartman, A. & Laird, J. (1983). *Family-Centered Social Work Practice*. New York: The Free Press.
- Hepworth, D.H. & Larsen, J. A. (1993). *Direct Social Work Practice*. Cal.: Brooks/Cole Publishing Company.
- Kanfer, F.H., & Schefft, B. K. (1988). *Guiding the Process of Therapeutic Change*. Campaign, Illinois: Research Press.
- Kirst-Ashman, K. K. & Hull, G. H (Jr.) (2006). *Understanding Generalist Practice*, (4th ed.) Belmont, CA: Thomson Brooks/Cole.
- Kotler, Philip and Roberto, Eduard L. (1989). *Social Marketing*. New York: The Free Press.
- Langer, C. L. & Lietz, C. A. (2015). *Applying Theory to Generalist Social Work Practice*. New Jersey: Wiley.
- Mattaini, M.A., Lowery, C. T. & Meyer, C.H. (1998). *The Foundations of Social Work Practice* (Second Edition). Washington,DC: NASW Press.
- McGoldrick, Monica, Betty Carter, & Nydia Preto, eds. (2011). *The Expanded Life Cycle: Individual, Family, and Social Perspectives*, (4th ed.) Upper Saddle River, New Jersey: Pearson.
- McGoldrick, Monica. (2011). *The Genogram Journey*. New York: Norton
- Meyer, C.H. (1983). *Clinical Social Work in the Eco-Systems Perspective*. New York: Columbia Univ. Press.
- Payne, M. (2020). *How to Use Social Work Theory in Practice*. Bristol, UK: Policy Press.
- Peccora, P.J., Whittaker, J.K., Maluccio, A.N., & Barth, R.P. (2000). *The Child Welfare Challenge*. New York: Aldine De Gruyter.
- Perlman, H. H. (1971). *Perspectives on Social Casework*. Phil.: Temple Univ. Press.
- Popple, P.R. & Leighninger L. (2005). *Social Work, Social Welfare, and American Society* (6th edition). Boston: Pearson Education, Inc.
- Popple, P.R. & Leighninger L. (2008). *Social Work, Social Welfare, and American Society* (7th edition). Boston : Pearson Education, Inc.
- Robertson, J. (1996). “Research on Family Group Conferences in New Zealand.” Hudson, J., Morris, A. and Maxwell, G., et al., (Eds)., *Family Group Conferences Perspectives on Policy and Practice*, The Federation Press/Criminal Justice.
- Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (1994). *Techniques and Guidelines for Social Work Practice* (3rd edition), Mass.: Allyn and Bacon.

- Sheafor, B. W., Horejsi, C. R. & Horejsi, G. A. (2000). *Techniques and Guidelines for Social Work Practice* (5th edition). Mass.: Allyn and Bacon.
- Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (2008). *Techniques and Guidelines for Social Work Practice* (8th edition). New Jersey: Pearson Education, Inc.
- Sheafor, B. W., Horejsi, C. R., & Horejsi, G. A. (2015). *Techniques and Guidelines for Social Work Practice* (10th edition). New Jersey: Pearson Education, Inc.
- Walker, H. (1996). “Whanau Hui, family decision making and the family group conference: An indigenous Maori view.” *Protecting Children* 12(3), 8-10.
- Walker, H et al. (2000). *Family Decision Making: A Conferencing Philosophy*. Phillips Foilprint.
- Walton, E. et al. (2003). “Strengthening At-Risk Families by Involving the Extended Family,” *Journal of Family Social Work* 7(4), 1-21.
- Weinreich, Nedra Kline. (1999). *Hands-On Social Marketing: A Step-by Step Guide*. California: Sage Publications, Inc.
- Wilcox, R., Smith, D., & Moore, J. et al. (1991). *Family Decision Making Family Group Conferences Practitioner’s Views*, Lower Hutt New Zealand.

参考文献 3 (教材ビデオ&DVD 等)

- ゲーリー・マーシャル (1999) 『カーラの結婚宣言：The Other Sister DVD 日本語・英語字幕あり』ブエナビスタホームエンタテイメント
- 是枝裕和 (2005) 『誰も知らない DVD』(株) バンダイビジュアル
- 堤幸彦 (2006) 『明日の記憶 (原作：荻原浩 光文社) DVD』(株) 東映
- 林浩康 (2016) 『子ども虐待における家族支援：ファミリーグループ・カンファレンスの実践：第 1 巻準備編；第 2 巻実施編』新宿スタジオ
- 高橋重宏 (2015) 『子ども家庭福祉分野における家庭支援のあり方に関する総合的研究 DVD』平成 21 年厚生労働科学総合研究事業研究班
- 野村豊子 (不明) 『回想法：①回想法とは何か②セッションの流れ③技法と展開④ケアへの継続 VHS』中央法規
- 前田ケイ (1995) 『SST の実際：基本モデル初級編 VHS』日本ルーテル大学社会福祉研究室
- 前田ケイ (2010) 『生きる力をつける支援のために：保護司面接のための SST マニュアル DVD 付き』日本更生保護協会
- 前田ケイ他 (不明) 『生きる力を創る第 1 巻：SST の理論と役割 DVD』ジェムコ出版・メディアパーク実際
- 前田ケイ他 (不明) 『生きる力を創る第 2 巻：SST の基本的技術 DVD』ジェムコ出版・メディアパーク実際

前田ケイ他（不明）『生きる力を創る第 3 巻：SST の実際 DVD』ジェムコ出版・メディアパーク
ク実際

松山真（不明）『第 1 巻：初回面接での信頼関係の確立』ジェムコ出版・メディアパーク

松山真（不明）『第 2 巻：ラポールの確立につながるノンバーバルコミュニケーション』ジェム
コ出版・メディアパーク